

この米侵略機を ヴェトナムに送るな!!

—5.28砂川闘争報告決定集—

— 主 要 内 容 —

現 地 闘 争 報 告

反 戰 闘 争 資 料

今 後 の 闘 い の 方 向

大阪に於ける反戦闘争の総括と展望

— 5.28から7.9へ —

5.28砂川基地拡張阻止現地闘争大阪代表団
全 大 阪 反 戰 青 年 委 員 会

1967. 6. 20 発行

平和な土地を絶対に基地にするな

全大阪反戦青年委員会議長　岡　田　義　雄

五・二八砂川集会は、大阪反戦からも多数参加して成功のうちに終つたことが伝えられ、われわれはこのニュースを見て一層闘志をかきたてられました。砂川基地拡張計画は、今、日本にあらわれた米日帝国主義の集中的なあらわれに外ならないことはいうまでもありません。だからこそ、この阻止のための闘いは激しく、そして英雄的に闘わなければならぬのです。今度の拡張予定地となつてゐる滑走路の北端から五日市街道までの九千六百八十五平方米は、絶対に渡してはならないのです。ベトナム反戦という闘いはこれを渡さないことによつて、最も具体的な闘いとして意義があるのです。

毎日この基地からベトナムへ鬼のような爆音が飛びたつてゐます。米帝は今の基地では最早足りなくなつて基地拡張滑走路の拡張を急いでいるのです。

買収反対を十二年間も闘いぬいてこられた二三戸の人々は、必死になつて高い買収という甘い誘いをはねのけて、祖先から引きついでできた土地を平和な土地として残すために頑張つておられます。この人たちを支援することは、ベトナム反戦の闘いに直結しております。今この土地は赤旗と全国の平和の闘士によつて守られております。どんなことがあってもこの土地を渡してはなりません。この土地を渡すことはベトナム人民の血を流さすことにつながつてゐるというギリギリのところにきてることを忘れてはなりません。

五・二八の闘いを一層強いものにして、これから闘いを成功させなければなりません。

今、平和のトリデは、砂川のこの土地であることを銘記しましょう。

職場のみなさんの圧倒的な支援とカンパに支えられて、五・二八砂川基地拡張阻止青年学生総決起集会に直接

2

参加してきました。

私達がこの集会をつうじて感じとつたものは、砂川を闘いぬくことをぬきにしてベトナム反戦闘争はあります。ないというなまなましい実感にほかなりません。即ち、この集会に対しかけられた権力の弾圧は、大阪の我々がおよそ想像もできない兇暴残忍なものでした。まさしくこのことこそ米日侵略者たちが砂川基地の拡張をいかに緊急、かつ重要な課題としているかを、そして又そのためには地元民をはじめ反戦を闘う部隊をてつていして弾圧し粉碎せんとする露骨な決意を明らかにしているといえましょう。私達が大阪で五・二八集会への代表派遣のとりくみをはじめた時、この集会は實に十一年ぶりの社共統一集会として開催されました。

このことをもともと喜こんだのは、いうまでもなく地元の人々にほかなりません。しかしながら、それは共産党の党勢拡大を第一義に考える誤った態度と、社会党總評の消極的態度によって実現寸前に流産し、分裂集会を余儀なくさせられました。私達は現下の緊迫する情勢を考える時、このことについてのない憤りと悲しみを禁じえません。

しかし、五・二八に全国各地から結集した一万余の青年労働者。学生は、地元の人達としっかりと連帯して、数千の武装警官隊と対峙して闘いぬきました。二・二八青年決起集会によつてともされた砂川の闘争は、五・二八において全国闘争の巨大な第一歩を築きあげたことを誇りをもつて報告するものです。ここに、皆さんの暖かい支援を感謝するとともに、ベトナム反戦の焦点として砂川闘争を全力をあげて共にたたかわんことを訴えます。きたる七月九日、砂川では本年三度目の大決起集会が開催されんとしています。この大阪からも、五・二八に倍する現地派遣を成功させねばなりません。五・二八に於て、我々を粉碎するためにおもむいた権力!! 東京機動隊の力を凌駕しうる動員体制、このことをぬきにして砂川の勝利はありません。しかもそれは、大阪に於ては大阪のあらゆる地域職場にわが反戦青年委員会の旗をうちたてるといふことの中で追及されねばなりません。理大阪のあらゆる職場地域に反戦青年委員会を築きあげよう。七・九砂川集会に、再度砂川派遣を完遂しよう。

再 度 七・九へ！

大阪代表団団長 昭 渡 正 佐

五・二八砂川基地拡張実力阻止の闘いに、はるばる参加された大阪代表団の皆さん本当にありがとうございます！

我々三多摩反戦青年委員会は、地元反対同盟とともに、大阪をはじめとする全国各地からの闘う仲間の結集により、我々の闘いが巨大な前進を勝ちとることが出来ました。我々は諸君の戦闘的な闘いにより限りなく励まされ非常に心づよく思っています。

二・二六闘争以来わずか三カ月にして、このような全国的な闘いへと発展したことは、我々の予想をはるかに上まわるものです。

我々は、この砂川闘争こそ、日本に於ける反戦闘争の中心環であることを確認し、更に更に不屈の闘いを進めいく決意を固めています。この闘いの力はとりもなおさず、「実力阻止」という一点において結集した、反対同盟と我々と、大阪をはじめとする全国の仲間の闘うための團結にもとづくものに他なりません。

我々は砂川に於て、「実力阻止」を合言葉にますます闘いの輪を拡大し、職場生産点に於ける労働者の本体の組織化に全力を傾注しつつあります。

二・二六から五・二八へ、そして七・九に於ては、総評・東京地評・三多摩労協の巨大な労働者武隊が決起しつつあり、この闘いは、砂川闘争の全国化への一大飛躍となるでしょう。

我々、地元「反対同盟」および「三多摩反戦」は、國家権力のいかなる弾圧にも、そして又、日共の分裂策動にもいささかも動搖することのない不敗の誓をますます強固にかためつつあります。五〇名にも及ぶ官権の不當逮捕の翌日、「地元反対同盟」から我々に対し、二万円のカンパがよせられました。このように地元反対同盟と我々の團結、そして大阪をはじめとする、全国の仲間との團結は、闘いの發展と共に更に固く結ばれつつあります。

砂川基地の拡張を実力阻止し、ベトナム侵略を阻止し、更に日本帝国主義の、侵略加担の野望を粉碎する闘いは、我々自身の力にかかっています。

砂川闘争の全国化と、闘いの質的前進を勝ちとり、砂川基地の拡張を実力で阻止するために我々三多摩反戦青年委員会は断固先頭に立つて闘うことと誓う。

現地闘争報告

五・二八闘争の意義は何か — 渡辺正昭 —

五・二八砂川集会 大成功！
全国から一万人の闘う青年を結集！

五・二八砂川基地拡張阻止青年学生総決起 滑走路前集会は、社会党総評の脱落、共産党の裏切りにもかかわらず、全国各地から結集した四〇〇〇の青年労働者、六〇〇〇の学生によつて開催された。

壇上に登る各地の反戦青年委員会、各大学代表の述べる決意の一言一言は一万の青年たちによって確認され、拡張実力阻止の決意と情熱はいやがうえにもたかまつた。先日東京裁判に於ける都公安条例違反事件の斎藤弁護人は『警官隊の暴力に屈することなく、徹底的に斗いぬこう。不当ない捕には完全黙否で頑張りぬくこと。弁護団はたい捕者を守り総力をあげて斗いぬくであろう。実力斗争こそがある。三多摩反戦からは、当初予定されていた統一集会破壊の真相が、共産党の独善的態度にあることが報告された。そして地元の人た

ちは、この共産党の態度に誰よりも憤りを感じている。しかしながらここで怒つたら砂川斗争はお終いである。地元は自共系集会には一切の協力を拒否したが、我々の集会にも残念ながら出席できない。しかし地元の気持は我々としつかりと連帯しておりデモ出発には地元総出でみおくらせてもらう。という地元の考え方が報告された。我々は、我々の集会を妨害するかのように花火をポンポン上げ、ボリウム一杯に音楽を流しつづける日共系集会に心底から憤りを感じつつも地元の人たちの「なんとしても共斗実現を」という気持を痛い程感じたのであつた。演壇の真うしろにひろがる巨大な立川基地から大地を搖るがす轟音と共に我々の頭上を侵略機が飛びたつてゆく。そして基地内では五十台をこえる警官隊のトラック、装鋼車、鋼鉄車が我々を監視し、十六ミリやカメラが我々をぬすみどりしていた。このような中で3時間に及ぶ集会は、歌とおどりと花火に終始した日共系集会とは対照的に、真に斗う者たちの集会であった。ここに労働者と学生は、地元の人たちを中心にしてしつかりと連帯した。このよくな中で3時間に及ぶ集会は、歌とおどりと花火に終始した日共系集会とは対照的に、真に斗う者たちの集会であった。

砂川基地拡張阻止を地元実力斗争を中心にして全国斗争へと発展させる巨大な礎石をきずきあげたのである。会場で集められたカンパは四万円に達し、地元反対同盟へ手渡された。集会の中により強固にうちかためられた斗う決意をかみしめつつ我々は全学連を先頭に大きくうねりながら立川へむけてデモンストレーションを開始した。

目次

平和な土地を絶対に基地にするな……全大阪反戦青年委員会議長	岡田義雄	1
再度七・九へ……大阪代表団々長	佐渡正昭	2
大阪の同志諸君へ……三多摩反戦青年委員会事務局長	齊藤裕志	3

現地闘争報告

五・二八闘争の意義は何か	佐渡正昭	5
絶対に権力に負けてはならない	荒木善久	7
現地の闘いに参加して	岳山岩義	9
基地と老人	小田秩子	10
安保粉碎の可能性を信じながら	村椿哲也	10
五・二八集会について	西山徳夫	11
闘争主体を労働者がになおう	床島允夫	12
五・二八砂川集会に参加して	大前弘志	12
日米反戦闘争の接点	南 広始	13
ベトナムと砂川そして職場	梅田令二	14
五・二八闘争を現地に見て	中村敏男	16
五・二八砂川現地集会に参加して	間 健次	18
砂川、五月二八日	藤井義昭	19
集会宣言		22

反戦闘争資料

砂川・ベトナム・帝国主義軍隊	編集部	24	
砂川人	マンガ構成	しばたこういち	24
激しくゆれ動いた砂川基地、この一年	編集部	30	
今後の政治的展望—七〇年へ向けて—	山田二郎	33	
スローガン	編集部	36	
大阪における闘いと今後の課題	福富 健	37	
編集後記	編集部	46	

この侵略機をベトナムへやるな！

地元農民の闘い

今防衛施設庁が提案している立ちのき料は一億円をこえる（一軒で一）といわれている。それを断乎としてはねのけて地元民は一年間滑走路の真ん前にガンバリつづけてきたのである。昨年の三月、九月と二度にわたって米軍機が拡張予定地につこんだ。最近はやはりのTV映画のスペイもの等で明らかに世界最大のスペイ組織CIAにとって離陸の失敗にみせかけて飛行機をつこませることなど朝メシ前のことであろう。この事故をきっかけにガゼン激しくなった買収工作（公安刑事をつかつたオドシや親族をつうじたなきおとしまで）が、この事故の決つして偶然でないことを裏がきしている。そのような中でついに九軒が脱落した。しかし残る二十三軒は今まで以上に結束をかためて頑張りつづけている。地元の斗いのスローガンは『やべトナム戦争反対といつた抽象的なものではない。それは『この米侵略機をベトナムへやるな！』なのである。かくて滑走路前拡張予定地には地元反対同盟をはじめ三多摩反戦の赤旗、各地から送られた寄せ書きが二十メートルあらう竹ザオにとりつけられアメリカの侵略に挑戦してハタハタとびらめくこととなつた。米軍機は基地拡張阻止の斗いによって三十と四十の積載量の制限をうけているといわれているが、この滑走路前に立てられた赤旗によつてさらに一〇%の制限を強いられているのだ。米軍・防衛施設庁は、合法・非合法あらゆる手段に訴えてこの旗をとりはずそうとしている。三月には米兵や立川のチンピラが夜陰にまぎれて基地内からしのびこみ旗をたおしひンジンをかけて焼きはらうといつづけるであろう。

警官隊の兇暴残酷な弾圧こそ、米日侵略者たちの砂川基地拡張にかける決意と、眞に平和を斗う者への容赦なき弾圧の意図をこひうえなく能弁に語つてゐる。翌日の商業新聞は「デモ隊の暴力」等歪曲した報道を行なつてゐる。又「赤旗」も同様に「学生の暴力、桑畠が荒され市民が迷惑」と報じてゐる。共産党の人たちはこの武装した警官隊・権力の先兵がみえないのか。日共系集会に集まつた二万人の人たちは砂川へ一体何をしに行つたのか。たんなるピクニックのつもりなら、こらうえなく地元民との斗いを冒涜する裏切りではないか。我々はこのよう歪曲と斗い地元民と断乎実力斗争を守りつづけるであるう。

共産党の独善性と総評社会党の消極性

五・二八集会は、都知事選で生れた共斗ムードを勢一杯生かした

地元の人たちの働きかけによつて実に十一年ぶりに再現する大統一集会として準備された。ところが日本共産党は『対等自立の共斗の原則』などといふ身勝手な原則（つまりは共産黨の息のかつた大衆組織を王催团体に加えるというものを）をふりまわして、この大統

一行動をぶちこわしてしまつたのである。共産党は、東京地評は社会党系だからはずすか共産党系の2团体を王催团体に加えなければ『対等自立』ではないと徹頭徹尾主張しつづけ、地元の熱意のみならず右傾化傾向を強める中で東京地評四方の労働者が結集しようとする歴史的な意義すらぶちこわしたのだ。地元の憤つたのはこれはかりでなく昨年以降緊迫する現地で寝食を共にして斗つてきた三多摩反戦の青年達が「トロツキリスト分裂主義者」とのデマ宣伝「地

事件があいついた。地元の人たちは倒されるたびに立てなおし、三多摩反戦の青年たちは黒づくめの装束に身をかためホシをとらえようと宿り込んでいる。そして日夜そびえたつこの旗を見上げながら地元の人達は云うのである『ベトナムの人達にこの斗いを知らせたい。なんと云つて喜ぶだろう』と。

エゲツナイ！

東京機動隊の暴力

地元の人たちの笑顔と日本山妙法寺の坊さんたちの激励に送られてデモ隊は大きくうねりながら立川へ向つた。隊列は十列、はるか前面に全大阪、北大阪反戦旗がなびく。約一時間後江ノ島ゲート前で全部隊が隊列をととのえ斗う決意をかためて東京機動隊四〇〇〇と激突した。大阪では『指揮を守れ』というのをおおむね『ハネ上がるな』ということを意味する。しかしこのデモでのそれは『日和るな！』ということにほかならない。それ程東京機動隊の暴力はムチャクチャなのだ。江ノ島ゲートの激突以降、夜九時半まで約五時間のデモは、三列から五列で、デモ隊を圧縮し並列規制をつづける彼らとのたえまなき斗いであつた。武装した彼らは投石よけのマスクからケモノのような眼を光らせ我々をけり上げ、警棒でこづきまわし、ツバをはきかけ、バリ雑言をなげつけつづける。抗議すればなぐりつける。スクランブルをゆるめればたちまち引っこぬき気を失わんばかりに殴りつけ放りだすのである。我々はデモを守り「拡張」「阻止」のシュピレをこだませつつ警官隊の暴力に抗して斗いぬいた。だが彼らは四十八名の仲間をうばいとり、五百名のケガ人を出したのである。（大阪代表団からも労働者一人がうばわれた）この

元は悪用されている」（五・二六赤旗）などと中傷をつけたこともある。これは共産党の独善性のみならず地元を中軸にした実力斗争という正しい路線を理解できぬところに原因してはる。社共の反省と戦列復帰を求めよう。

職場のみなさん。きたる七・九現地大集会には五・二八に倍する現地派遣を成功させよう。五・二八斗争犠牲者救援カンパを送ろう。反戦青年委員会の旗の下に結集しよう。

七・九へ再度砂川へ

五・二八集会の成功をふまえて三度、現地集会が計画されています。しかも東京地評四方の労働者が組織参加を行ないます。大阪からも再度、五・二八に倍する代表団を派遣しますよう。

■ 絶対に、権力に、
負けてはならない

荒木善久

五・二八集会は、都知事選で生れた共斗ムードを勢一杯生かした地元の人たちの働きかけによつて実に十一年ぶりに再現する大統一集会として準備された。ところが日本共産党は『対等自立の共斗の原則』などといふ身勝手な原則（つまりは共産黨の息のかつた大衆組織を王催团体に加えるというものを）をふりまわして、この大統一行動をぶちこわしてしまつたのである。共産党は、東京地評は社会党系だからはずすか共産党系の2团体を王催团体に加えなければ『対等自立』ではないと徹頭徹尾主張しつづけ、地元の熱意のみならず右傾化傾向を強める中で東京地評四方の労働者が結集しようとする歴史的な意義すらぶちこわしたのだ。地元の憤つたのはこれはかりでなく昨年以降緊迫する現地で寝食を共にして斗つてきた三多摩反戦の青年達が「トロツキリスト分裂主義者」とのデマ宣伝「地

事件があいついた。地元の人たちは倒されるたびに立てなおし、三多摩反戦の青年たちは黒づくめの装束に身をかためホシをとらえようと宿り込んでいる。そして日夜そびえたつこの旗を見上げながら地元の人達は云うのである『ベトナムの人達にこの斗いを知らせたい。なんと云つて喜ぶだろう』と。

事件があいついた。地元の人たちは倒されるたびに立てなおし、三多摩反戦の青年たちは黒づくめの装束に身をかためホシをとらえようと宿り込んでいる。そして日夜そびえたつこの旗を見上げながら地元の人達は云うのである『ベトナムの人達にこの斗いを知らせたい。なんと云つて喜ぶだろう』と。

と思うと、さすがに身がひきしまる思いだつた。集会の最中に、決議文が読まれるなかを、輸送機が大きなボディを見せ飛んで行く。耳をつんざくような爆音のこして。大地がゆれ、僕たちの腹の中まで、ビリビリと響いてくる。反対同盟の「砂川からベトナムへ飛行機を飛ばすな」という合言葉は、それ自体誰にでもわかりそうであるが、現地へ行つてはじめて、重みを増してくるものだと思う。

集会宣言で地元反対同盟との固い連帯のもと、今後の実力阻止斗争を約し、いよいよデモへ移つた。互いにガッチリとスクランムを組み、力強くふみ出した。あの團結横町では、日本山妙法寺の尼さんが笑顔で深々と礼をし、僕たちのために祈つてくれた。反対同盟の奥さんたちと握手をする。ここでは、毎日毎日が斗争なんだ。どの頃にも、不屈の精神がじみ出ている。

強く強く前進する。ケート付近ではデモに参加した学生、労働者に対し、官権は気違ひじみた、露骨な弾圧を加えてきた。まさに狂氣の沙汰である。大男が頭の上へおおいかぶさり、なぐる、ける、耳を引っ張るなどの暴行を加え、はては、こん棒で頭を強打する。隊列を組んでいる時、彼らは防石面と鉄カブトの下で、無表情な顔をのぞかせているが、おそいかかってくる時には、もはや、理性など一かけらもなく、眼も血走っている。まのあたり警官の暴行を見、自分もやられる時、「彼らは果して人間なのだろうか、よくしこまれた動物ではなかろうか。いや、ロボットかな。彼らの信条は何だろう。」そんな疑問が頭をかすめる。そして、次第次第に頭の中へ広がり、離れない、絶望感を抱くこともある。

「米軍は、この騒ぎを見て、ほくそ笑んでいることだろう。」

「そりやそうだ。おれ達のために日本人同士がぶつかり血を流すのだから。」

現地の闘いに 参 加 し て

岳 山 岩 義

私の産地は滋賀県、そして飼育されたのも、今はねぐらも滋賀県、この愛する滋賀県が琵琶湖を有しているが故にそうであるように、東京都立川市も又、「広くて、せまい所」だ。

立川市『そこはまさに基地の町だ。

目に入るのは横文字ばかり、れっきとした日本列島の中に、我々日本人が自由に入りすることが許されない外國がある。ここだけではない。日本の各地にそれはある。しかもその中には自分たちのあらゆる欲を満たすための野蛮な人殺の道具が出積されているのだ。馬鹿げた話だが事実なのだ。

のぞき見たりでも基地内にはグランドやプール、はてはボーリング場まで整っている。ときおり、我々の頭上を飛びたつジエット機の爆音には閉口した。地元の人達はどうのう思ひでこの爆音を聞いているのだろう。砂川だけでなく、全国の基地の町の人達は、沖縄の人達は何を考えているのだろう。もう不感症になつてているのだろうか。

我々のベトナム反戦の斗いがマンネリ化しているのと同じように……いや、必らずしもそうではない。少なくとも、この砂川では、現に地元民は十年以上も拡張阻止の斗いを続けてている。

何かを感じ、何かを求めるが故に。

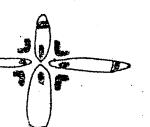
滋賀県はたしかに琵琶湖がその面積の大部分を占めている。しか

坊さんがデモ隊と機動隊の間に割つて入り、目をつぶり、一心にタイコをたたいている。僕たちは一瞬、斗争を忘れた。急に心がやまる。こんな気持は行つた者でないと理解しがたいと思う。彼らも闘士なのだ。坊さんが行つてしまふと、我に返り、現実の中にもどる。

「民主警察」「市民のための警察」とかいう言葉を耳にすることがある。しかし、ウソもはなはだしい。この腐敗しきった、民意の反映されない世の中で、参政権の行使である、街頭行動すら封じてしまおうとしている。こういうところに警察の本質というものがくつきりと浮きでているのではないか。

絶対に権力を負けてはならない。今こそどんな弾圧をもはね返し、力強い斗争を組まねばならない。

皆さん、反戦青年委員会に結集し、反戦の輪をもつと拡げ、もつともっと密なものにしましよう。この五・二八砂川集会の成功は、今後の反戦斗争を進めて行く上で一つの重要な契機をつくったといえるでしょう。砂川の火を消すことなく、もつともつと大きくしようと。反対同盟、学生、その他あらゆる勢力と團結し、実力斗争で戦いぬこう。（全電通）



基 地 徹 廃 に 向 け て

ガ ン バ ロ ー イ

し、琵琶湖はそれなりにその存在価値がある。琵琶湖のない滋賀県などおよそ考えられない。立川においても、同じく基地のない立川は考えられないのだろうか。

いつたい日本に基地は必要なのか、今、日本からアメリカ基地を徹廃すればどのような問題が起きるのか、もしかりにおきるとすれば、それは基地があつてもなくともおきるものだと思う。むしろ基地がある方が問題のおきる可能性大であろう。あつて益ないものなら、ないに限る。土地を取りあげられることもない。爆音の公害になやまされる事もない。機動隊とぶつかってきずつく必要も更にない。

砂川の反対同盟の人達が何億という大金をつまれても、あえて十一年以上拡張阻止をさげびづけている原因はなんだろう。彼らをそこまで意識させたものは何か、これは私一人が結論を出すべきものではないだろう。日本中の人々と共に、彼らの立場にたつて考えてみよう。あなたもいつしよに。

しかし、我々は地元の斗いをあくまで支持し、今後さらに激化の一途をたどるであろうこの斗いに積極的に参加し、勝利の日まで斗争抜くことを無言のうちにこの体で地元の人達と、又、いつしよにスクランブルを組んだ仲間と約して來たのではないだろうか。

小田秋子

砂川で

可能性を信じながら

村椿哲也

滑走路をつゝ走り、私たちの目の前でグンと機体を反らせて飛び上がり、戦火のベトナムへ飛び去つて行く米軍の輸送機。私たちは、こめてベトナム人民との連帯を叫びながら、現実には、素晴らしい皮肉を砂川基地拡張阻止、五・二八集会は重要な意味を持つていたのだ。

集会に参加した一万人の青年に、「一人の老人はつぶやく」「すみませんあなた達は、この私を怒つているのでしょうか。立川の基地で働いているこの私を」

「でもね、安保があり、米軍の基地があり、ベトナムに戦争が存在する今、私自身を壊さない限り、私はあなた達に詫びることしかでききないです。」

「戦友は夜ごとに、私をゆり起こしては、国辱だとののしり、しかし結局日本は負けたのだと言つて消え去ります。もう国辱の限りを尽くし果てたこの口に、残されているのは、私、いえ、あなたたちの良心だけです。」

「自分自身を壊わせないで、毎日、立川へ行つてゐるこの私。しかし、いつかはきっと、あなた達の基地徹廃の声が、拡張粉碎の怒りのデモが、あなたの情熱が、私のような人の内部にも響きわたり、みにくいものが自分自身の中へ壊われ始める事を知るのです。

砂川は、ベトナム侵略戦争のさまをのぞく所であり、安保を考える所です。(全電通)

彼らが以前として独善的なやり方を続けるなら、「日共組織がかわいいか、ベトナム人民と世界の階級斗争がかわいいか?」と問われることになろう。

今日の米帝国主義と経済情勢は朝鮮戦争の前年と非常によくていると言われる。日本海での日米合同演習もオニセイ朝鮮戦争の予行演習であろう。

日ごとに反動化する状勢に対し、真に砂川を階級のトリデとするために、現代の青年が労働者、大衆を指導する原動力となるべきではないか。(交通労働者)

五・二八砂川集会について――

西山徳夫

砂川事件については、今までいろいろなもので読んだり聞いたりしてある程度は知っていたが、現地に行き大差があることに気がついた。

立川基地の広さにしても想像以上で、基地の前より真反対の砂川基地拡張予定地まで行くのに、約一時間はかかった。(見た時の感じでは、チヨット見当つかなかつたが)このような基地が街の中心の側にあるのだ。それに、住宅難だと言われる今日、どうかと思つた。

これは現地の人たちから聞いたことであるが、現在この基地よりベトナムへ、戦争に必要な物資が大量に輸送されているとのことである。ただ聞いただけなら、半信半疑でうなづいただけだと思うが、実際この目で見た感じでは、輸送機の大きさにしても想像以上で、

五・二八砂川青年大集会に参加して、私は、今までの学習での頭の中の不明確だったものが一気に光をあびた気がした。実践の重要さとはこのことだろう。私にとって、五・二八砂川斗争は大きな外因であつたし、社青同での学習会は内因の蓄積であつたように思う。もし私が事前に何も学習せず、砂川に行つていれば単なる体育であつたろう。毛沢東の言葉をかりれば「鶏の卵は適当な温度を与えるとヒヨコとなるが、石ころに温度を与えてヒヨコにはならない」と言うことであろう。

今度の砂川行きで自身の内部変化で最大の利益は、この学習の大切さと実践との交叉であった。……と思う。

自身のことはこれくらいにして、集会の時、感心したのは、地元反戦の声明である。全学連の代表は、どちらかというと理論くずれで、建設的な言葉にとばしく、青木さんはじめ、地元農民が、往古から血と汗を肥料として守つてきた土地の上の実感は少なかつた。私なら「みなさん! そのあなたがたの立つてある足元の土をにぎってみなさい。日本の農民の血と汗のにおいがしないですか。人々の往古の声が聞こえませんか、この土地をアメリカ帝国主義の侵略機のふみ台にするのか!」と言いたかった。

日共については、私自身もとほうもない、いきどおりを感じる。

大会中も何度となく離陸していた。それに現地の人たちの話では、その輸送機が一昼夜休まず離着陸しているのである。これらにより私は美感として考えられるのである。

現在のところは、輸送機に100%の積載量を積むことができないそうである。それは滑走路が短く、そのためには基地の拡張をせまつてゐるそうですが、それは、輸送機の離陸のさい滑走路いっぱい使つてゐることでも、又、基地拡張予定地が滑走路の延長にあること、なお現地の反戦青年団の人たちが、基地拡張反対の旗を、滑走路の前、基地拡張予定地に立てましたが、基地がわざり取り除いてくれとの依頼があつたそれですが、ことわると、今度は、非合法な手段で旗を取り除きに来たとのことでしたが、このようなことに対するものためにするのかがわかります。

デモにしても、大阪などの行動とは全然違いました。正直言つて、デモに入る前までは恐ろしく感じましたが、行動にうつり、多くの人たちとスクランブルを組んでいると恐ろしさなど忘れてしまいました。

現地へ行くまでは、いろいろな疑問的がありましたので、これからおることに對して、どのような行動をすればよいのか迷つてしまましたが、現地へ行き、全体とは言いませんが、疑問点も少なくなつております。ただ残念だったのは、拡張予定地の地主より、直接話を聞けなかつたことです。私は現在の日本において、何ごとにおえは身近なところで、所内でくぱつてゐるチラシにしても、それを読んで見て、一応疑うのである(全部とは言わない)それは何事につけ記した人自身のことを書いてあるのなら、実感としてとれるのであるが、間接的な人が記したのでは実感が共なはず、ふつう関係

のないような感じを与えることがあります。それは、最近上べだけで中身の無いことが多いように思う。そのためであろうと思うが、砂川へ行きまして勉強になりました。

なお、このような機会に多く出席するよう、また、多くの人たちに機会を与えることは、成功のための源となると思う。（全電通）

になわれなければならぬという将来に向ける展望を現実に確認しつ戦斗的デモンストレーションにおいては、東京機動隊の暴力に屈せず、最後まで斗つたことを報告し、斗いへの決意とする。

（全国一般労働者）

闘争主体を

労働者がにおう

床 島 允 夫

大 前 弘 志

今日まで、全國の先進的な活動から遅れをとつてゐた吹田の反戦斗争にとつて、反戦青年委員会の結成もさることながら、砂川への三名の派遣は、まさに吹田での反戦斗争の左派的な飛躍を物語るものである。二・二六塊地斗争を上まわり、一万余の全国の先進的労働者、学生を結集して五・二八斗争は実現した。基地から飛び立つてゆく飛行機の爆音に集会の一切の音をかき消されながらも、集会は、斗争を放棄したかのような日共のお祭り集会を横に徹底した実力阻止を誓い合い、社会党的斗争放棄と日共の分裂主義への批判とともに真に斗う部隊の結集を確認したのである。塊地住民の斗いの強化という方針は、我々五・二八斗争へ参加した者に、地域へ帰つてからの斗争に、砂川塊地に於ける斗いと同様の斗いを継続しなければならぬことを示し、又はげましを意味していた。そして我々は今や、七・九斗争へむける地域活動を展開してゆがなければならぬ。そして集会に参加した労働者部分のたち遅れ——即ち戦斗的斗争の中での学生部分への依拠を打破し、斗いの主体は我々労働者が青として参加できなければそれを色々な形で我々の行動を、支援すべきであると思う。

一方社会党及び総評の労働者は、共産党、民青が参加できないからといって、自分達まで脱落する理由はないはずである。そのような行為ははずべきである。

我々が砂川を後に立川駅に向つてデモンストレーションを開始した時、我々の前に立ちはだかる機動隊に接した時、我々の頭上に暗雲のごとき黒い巨大なる、国家権力がおそいかつてくるように思われた、その時、スクランムの手に力が入つた、そして感じた、我々は團結しなければならない、我々一人一人では、この黒い大きな権力という名の怪物を倒すことはできない、そして我々が眞に平和を勝ち得ることはできない。』共産党、民青の皆さん、社会党、総評、全國の労働者の皆さん、團結しよう、團結しなければならないんだ」と呼びかけたい。

（全電通）



日米

反戦闘争の接点

南 広 始

我々反戦委は五・二八砂川集会において、全学連の斗士と共に戦斗的戦いを経験した。佐藤政府の反動化の先端を受けもつ警察権力と、政府への追従のみを守ろうとする司法権に対し、日韓斗争に出された判決を足がかりとして、徹底した戦いを展開した。

この戦いは今後の方向を明らかにした。

一、④の装備とその暴力行為の残酷性と、挑戦的態度は、この種の戦いの戦斗的にならざるを得ない必要性を示した。

二、地方裁判所判決の公安条例の違法を示した。

しかし、この判決が学生の行動に対して出されたことは——革新政黨の見解等まったく問題ではないが——労働者の戦いの弾劾として受けとめるべきだ。

この二の問題は戦への労働者の広範な参加を必須たらしめている。この二の問題は戦への労働者の広範な参加を必須たらしめている。

他方アメリカにおける反戦斗争は規模においてもちろんのこと、質的変化は史上に記されるべき革命性を帶びる。それは白人の反戦運動と黒人の解放運動の結合によつてもたらされた。しかしこの運動の革命性もいくつかの問題点によって限界を持つており、この問題の克服こそが運動のすべてを規制するだろう。この克服と日本の斗争とが結びつくとき我々の斗争はさらに発展し連帶は強化され

るだろう。

(全電通)

一、「ベトナム人と黒人の殺し合い」という人種戦争であり、非白人の根絶を意図している」。この位置づけはベトナム戦争の国際性において一面すぎる。

一、黒人は人種戦争の被害者であるという意識が、現に加害者であるとの責任感を減退させている。

一、ベトナム戦費増大によって国内の社会改革が不可能としている

——この国内改革がベトナム人の斗争とどう連帶するのか、この位置づけを持たない限り孤立主義に陥る。

一、白人運動のアナキズへの傾向。

これは最も発展した資本主義国に於ける人間除外の問題をどう反戦と結びつけるか……つまり反戦、(黒人)解放運動でそれは解決できるのかこの不安が斗争の中で己を認識しようとする強烈な実存的心情によるものだ。

以上人民の連帯と国際的連帯その中の人間性解放の問題が重なり、その解決の糸口をつかみかねている。この情態の克服は彼等自身の問題としてより世界労働者の連帯への問題提起である。

ここで日本の運動の方針は王体的にも、客観的にも次のように集約されるだろう。

我々の斗争はますます激化と戦斗性を持つだろう。そしてこの戦いは当然、資本主義の全くの矛盾と対決せねばならない。つまり基地拡張阻止、アメ公帰れ、沖縄返還だけの戦いでなく、当然職場斗争とも結びついた社会革命への道をたどらねはならない。そのことは、塊実化した殺戮基地として使用されていること——我々の手がベトナムの血で汚れていること——この責任と十一年前の戦いの限

棒のようにならがった学徒。じゅずつなぎになつて夕やけの下を、泥と血にまみれて死の行進。……

そして、「梅新にて座り込み」をし、何千何万回となく否無言で叫んだ「ベトナム侵略反対!」——足早やに通り過ぎる足々をみつめて、一年近く。ある時はよっぽらいのさかなになつて……そのとき、ある対話が聞えてきた。

(2)(1)「佐トさん、お願ひ、あんな非人道的な戦争に協力しないで。」
権力者眼をきょろつかせて、

「そうそう、若い女の人がいつていつたよ「戦争ってむごいわねえ」と、又、戦後誰かが、

「あのとき斗う勇気と自信があつたら聖戦[×]を体験しなくてもよかつたのに。」といつたけ。おゝ人道主義者達よ! いくらでもヒスティックに叫べ! その叫びが大きければ大きいほど、俺は心よい氣持がする。」

(2)「佐トさん! 多くの人たちがベトナムの戦争に反対し、抗議していますよ。」

「マキャベリージャないけど、少しぐらい抵抗がなくてはねえ。君らの氣持がスーとするならいくらでも抗議してくださいよ。それそうと、それ、あそこを歩く二人に幸せそうにキッスしあつていてる一人に聞いてごらん。「ベトナム戦争には反対」ときつとうよ。しかし「あんまり、ばくらとは関係ないじゃないの」ときつといふよ。フフフ……」

(3)夜があけてくる……日光に眼がさめる。東京駅、そして立川駅砂川へ。滑走路前の低い低い(他のところ比して)ざくと、すらりとならんだ「カーゴマスター」を目前にみて、目がくらむ。ものすごい爆音。一步またげば、基地内へ簡単に入れる。逆にいふなら

ベトナムと砂川 そして職場

梅田 令二

「我々は二つのベトナム、三つのベトナム、そして数多くのベトナムを作るべきである。」(ゲバラ)

①「砂川へ行つてパクられに帰ってきたら死刑もんたぞ。」と、仲間の声援に送られて、五月二十七日、東京行の夜行列車の人となつた。明日に備えて、椅子の下のベットにもぐり込み、安眠? をむさぼる。しかし、ときたま頭の上をとおりすぎる太き足に眼はさめ、いつのまにか、頭の中をかけめぐる……破損した風船の修理、野戰病院の負傷兵、兵器の製造と輸送と、飛行機が下りたつベトナム帰りの米兵の物音におひえ、ピストルの乱射・ベトナム向けのガムの荷造りのアルバイト学生、ベトナム特需が日本とアメリカを救っていると叫ぶ中小企業のおっさん、死体一人の洗い料アルバイト五〇〇〇~一万円……あゝ資本主義体制は、俺らの声怒りに関係なく押し進んでいる。時々切れた「しゃみせん」のように放たれる抗議の声……ベトナム戦争の写真、流血、なぐり殺し、首しめ、ナイフを胸に五分刺し、集団リンチ、ごう問、強姦、耳をそき、首をはねられたベトコン。乳首を切りとられ、乳房をえぐりとられた女、全身やけどにただれた少年、一〇〇万を越す死者廃人。ベトコン少年の銃殺。「民族解放万才」。毒ガスにて死亡した者何万。病院もやかれ、ベットの中で火だるまになつて死んだ病人。学校の途中で

ブルドーザーの下に基地は簡単に拡張できるし、砂川の農民を愚るうし、押えつけられる。そんな接点で、俺たちは集会をもつた。砂川の農民は、十一年前の全学連東京地評の労働者中心とした斗いのなかで、土地を守り抜いてきた。そして再び、ベトナム侵略戦争の拡大に伴つて、拡張が企てられている。砂川の農民は、「一生の斗いですね、生活どと、いのちどとかけにや勝てませんね。敵は強いよ。」と胸をはつて斗つている。一億円の買収をもはねのけ、生活をかけて斗つている。俺の胸を深くゆさぶった。しかし、ふと、奇妙な氣持におそわれた。すぐ近くを大きな爆音を残してとび去つていく、「DC七型機」と共に、俺のいる場がとびさつっていくかのような氣持におそわれた。

何かが、ゆきちがつてゐる。転倒している。キュール革命の指導者ケバラは「オニのベトナム、オ三のベトナムを作るべきである」と叫んだ。しかし、俺たちに叫べれるのか。しかし、とにかく俺は斗うと、自分にいいきかせてデモに出発。

幾度か、経験した④の暴力、挑発、権力への怒りにくしむ——斗かわぬ日共への怒り——そして、つかれた。デモは終わり、「つかれ」が俺の身体の中に残つた。

④「ベトナム人民は、アメリカ合衆国の技術の暴力に耐えている。」「ベトナム人民と連帶しようとする世界の進歩的陣営は、平民たちの拍手をうけてローマの競技場に立つてゐる剣斗士をながめているような苦いアイロニーを感じる。犠牲者の勝利を願うだけでは十分でない。なすべきことは死と勝利の谷間で彼らと運命を共にして斗争となのだ。」(ゲバラ)

砂川の斗いを実力斗争でもつて勝利させ、ベトナムの人民との斗いとの共斗を得なければならぬ。これは事実である。しかし、く

り返される砂川現地斗争は、この事実のうえにたって、逆に、我々労働者階級に、痛烈な叫びと力をもってせまつてきている。農民を指導し、社会主義革命の中核である労働者階級の奇妙な逆立ちした姿は、今日のわれわれではないか。

このことに「いたみ」と「怒り」を感じなくて、どうして現地斗争を語れよう。

職場で、資本との直接の対立点に、「ベトナム・砂川」斗争を組織していかなければ、どうして「死と勝利の谷間で、彼らと運命を共にして斗うこと」が出来よう。俺は社会主義革命を成功させ、共産主義社会を目指す一人の青年として、断乎、砂川の農民への賛成。④の暴力への怒りに終ることなく、職場の中に、「ベトナム・砂川」斗争をもちこむことを決意し、新ためて、「あらゆる革命的叛乱は、その目標は、まだ階級斗争とは、縁遠いかにみえようとも、革命的労働者階級が、勝利するまでは、失敗せざるをえないこと。およそ、社会改造は、プロレタリア革命と封建的反革命が、世界戦争において、武器をもって勝負を決するまでは、空想にとどまる」と。「貨労動と資本（マルクス）」を確認したところです。

（国鉄）

度の予算を見ても三次防計画によりこまれた予算は二兆四千億円という巨額にのぼっている。かりに一步ゆずつて安保条約を認めたとしても条約内にうたわれた日本の安全とベトナム戦争は関連付けることは無理がある。にもかかわらず日本政府とアメリカは安保条約を誇大解釈し在日米軍基地をベトナムの補給、修理、中継基地として重要なものにしてしまったのである。

去る五月二十八日、米軍立川基地の拡張反対集会が反戦青年委員会と学生によつて開かれたとき、私は幸いにして参加することができた。私はこれを、集会に参加することと自分の目で現地砂川地区の現情を確める一石二鳥の機会と思った。今までにもいろんな反戦行動に積極的に参加してきたつもりだしその意義についても十二分に理解しているつもりでいた。しかしそれはあくまでも自己満足に過ぎなかつたことを思い知られたのである。現地砂川の人達は私には思ひもつかなかつたすばらしい拡張反対斗争を続けていたのを見せつけられた。以前には映画でこの人達の真剣な斗いを見たことがある。でも今度は映画ではなく実際にこの目で見、この耳で聞いたのである。

何よりもたのしく思ったのは拡張により農地を接収される農民達が今では農地を支うという気持からハッキリと、ベトナム戦争反対とその原因である安保反対とともに当然のこととして受け取れる。誰よりも彼等は立川基地のベトナム戦争への役割を知っているからである。ついでに立川基地のベトナムに対する役割につ

五・二八闘争を 現地に見て！

中 村 敏 男

中東の火薬庫といわれたアラブ諸国とイスラエルの間でついに戦争の火ぶたが切つて落された。一方ベトナムでは二十年に及ぶ長期的な斗いが、止まる所を知らず続いている。

我々日本人はこの二つの戦争をどのような感覚で受け取っているのだろうか？ 戦後二十二回目の終戦記念日を間近にひかえ今一度戦争の本質ということを考えるべきではなかろうか。戦争を知らずに育つた人々も今では社会人として学生として学生として我国にも大きい影響を与えるまでになった。つまり日本は敗戦を機に一やく平和と民主主義の国に生まれ変わったはすである。世界にも例のない立派な憲法は我々日本人が世界に誇りうるものだと思う。才九条は高価な犠牲と苦しかった体験をふまえてでき上がつたもつともすぐれたものにちがいない。だが、その反面この才九条は人間の創る憲法の中はどうして今まで明記されていなかつたのか不思議にさえ思われる。とに角表面的には平和で民主主義の確立された日本国民にとっては、もはや政府に対する反戦要求等おこりうるはずがないのである。でもそれは悲しいかな未だ理想の域を出ていない。現在日本には安保条約による米軍基地が置かれ、日本自身も自衛隊（軍隊）を持ち年々とその軍事力は強化されてきている。本年

いて記しておこう。アメリカがベトナム戦争につき込んでいる金額は一説には五百万ドルともいわれている。もちろんこれは日額であります年間に約二十億ドルという巨額である。この内の七割といわれる金が直接武器弾薬だと聞いている。こうした物資が直接立川の空論部隊によって日本から送られて行くのである。だがそれだけではない。日本はすぐれた工業生産国であるから軍用機、艦船を始め兵器の修理、直接日本からの買付もむつかしくはない。政府資本家もこれに協力すべく万全の態勢を取つてゐるのである。さらに米軍の死傷兵を立川へ送り基地内で死体処理までしていることは今では公然の秘密とさえいわれている。現地の人達が今さらこれを知らないはずがない。そこで彼等は滑走路の端にある自分達の農地に高いさお竹を建て少してもベトナムへの空輸を減らすことを思いついた。私はこれを聞いて驚いた。この残されたさお竹一本がそれ程大きな影響を与えているのかと……。実際このさお竹のため輸送機の端でこうした斗争をやられては米軍にとっては正に目の上の瘤である。

日本からこの斗争がなくなつた時は憲法が完全に守られ、日本から兵隊の姿が消えた時以外にはなかろう。我々は未だ一日たりとも監視の目をゆるめてはならない。今日より明日、明日よりは明後日へとこの斗いを広めてゆくことを約束しようではないか！ 私も約束

五・二八 現地集会に参加して

健 次 間

私が、直接、現地へ行つてみたくなつたのは、ある人と話をしていた時、砂川で現地の農民が頑張っているのは、土地が惜しいからではないかと言われ、そうではなく、ベトナム反戦といった意識に高まつてゐるからだと思ひますよと答えた時に起きたのです。

その上に、全東希問題などで、署名運動も含めて、実際に斗わない限り、力にはならないと考え、現地斗争の必要性を考えていた時でした。単独でも、参加しようと思っていたところ、総評が行くというので、便乗してもいいと思っていた。しかし、総評が、やめたということになつた。大阪から反戦青年委員会が参加することを知つて、二十七日、大阪駅から、仲間に加わつた。私にとってだから、目標は、一つは現地の斗いを実際に、自分の目で確かめることであつた。更に、その斗いを、大阪の仲間に持ち帰ることであつた。それらは、自分が現地の斗いに、参加することによって、つかめる持つた。

二十八日、立川に着く。立川は、基地の町と聞いているが、英語がすらりと並び、日本語は、おそなえについているというわけで、その感を大きくする。駅前は、当日の集会参加者でいっぱい、赤、青、黒の旗がなびく。ところが、耳に入つてくるマイクが、不幸な事実をつけて、がっくり。社会党が、集会に不参加、日共が、単独分裂集会、全学連と反戦青年委員会が反対同盟と共に、集会といふ意味も、実感としてわかる。

滑走路をはずして、フインガーをのぞくと全くののんびりした農村風景が写る。よく肥えた土も、農村を思わず。その農村の各家の前に、激励の旗が並び立ち、おはさん達の活氣ある動作が、斗いを思わせ、がんばりますよと力強くいう声が、十二年間の成長と変化を思わせてくれる。

砂川の人達は、土地をとられる斗いに、無理にたたまれる時点から、ベトナム反戦へと成長したと思われる。一億円を選ばぬ力強い意識を身につけたようだ。

意氣上がる我々のデモは、交通規制された道路をいっぱいに進む。砂川から少しばしはされる所に、ボリさんが待つていていた。市民の通行は、規制されているのではない。従つて、道は我々、ボリさん、報道陣、近所の人達であつた。ボリさんはその道で、ねばり強く挑戦していく。「市民の人達の通行のじやまになるので、四列で歩いてください」と。ボリさんが通行の邪魔をしなければ、さつさと歩けるのに。

やがて、機動隊に命令が下る。実力で整理せよと。そして、ケイ棒が動き、パクリ始める。我々は、スクランムと石で応戦した。この斗いで我々の仲間数百名が傷ついた。

日共の諸君が、我々と共におり、斗いに参加することは、できな

わけだ。

またしても、目的を忘れ、党勢拡大を優先させる考え方か、横行したのだ。どのようにして、基地拡張による現地斗争が拡張を阻止したのか。十二年前の斗いの教訓は?、実力斗争による現地斗争が拡張を阻止したのか。残念。途中、民青の人々が、歩いているのと一緒になる。彼等、云わく、「あいつらは、トロッキストで、りくつばかり言つているし、はね上がつた、ジグザグデモや座り込みをして、我々を悪いやつのように思はせるんだ」と。私は頭がないと思つていいのが、こんなに悪くはないなと思う。一つは、りくつを言わなくて、革命なんかできるものかと。一つは、民青君は、そしたら、実力斗争をやるのかい。それとも、君の実力斗争は、歌つておどつて、遊ぶことかな。我々は、りくつばかり言つていてなく、りくつもいい、そして行動もするのだと。一つは、ボリさんからも、悪く思われなくなるようにして、どうして、革命だねと。

そして砂川に着く。さすがに、沢山集まつてゐるわい。それにしても、お祭りみたいで楽しそうだな、竹の柵なんかして、ボリさんから、守つておられるのだなと思つて、写真をとつて、どうも寝なんだ。少し、奥へ行つて、滑走路付近に行くと、そこにも集会がある。大阪は、早い方で、その集会は、しょぼくれてる。そうなんです。お祭りの集会は、日共の集会なんです。沖縄の民謡や、あちこちの民謡が、我々のために向けられたマイクから流されるのです。これみよがしのいやがらせなんです。(現地の青木さんも、頭にきて、文句をつけに言ってくれて、途中から、聞えなくなつた。)

全学連、反戦青年委員会の集会は、初めこそ、しょぼくれていたが、一時をまわつたころには、五千人にふくれていた。各地の反戦青年委員会、全学連は、ぞくぞくデモりながら、到着してくる。

いのか、あの二万五千人の物質力の中身は、からなのか。残念。迫りくる実力阻止の斗いに、力を貯えるため、全国的斗争へと發展させておかなくてはいけない。断固として、守りぬくこと、これは、歌つて、おどつて、バイバイでは、だめだと強く思う。

大阪にも、その火の手を拡大させねばならないと思う。この頭と目にやきついたあの現地の斗いを、みんなのものにしたい。

そう思ひながら私は、無事に帰路につけた。

(教育労働者)

砂川

五月二十八日

藤井義昭

砂川の土は赤茶けて乾き切つていて。西から、東から、その乾き切つた土を踏みしめて土ぼこりにまみれながら、続々と斗う仲間が、基地の集会に向けて結集しつつあった。

砂川基地拡張阻止集会の現地では、すでに数千の斗う仲間が、初めて軍事基地を眼のあたりに見る僕等と共に、柵一つ隔てて手の届きそうな滑走路の端に集結し、現地反対同盟や三多摩反戦の人達の説明に耳を傾けていた。

一九六七年五月二八日。大阪反戦青年委員会を代表して現地斗争に赴いた我々にとって、砂川とは何であり、砂川斗争とは何であるかを改めて確認する時が迫つていて。十一年前の斗争は、その血と涙を、この土、今、我々が踏みしめているこの土の中にしみ込ませてゐるはすだ。あの時斗つた学生、労働者は、今、様々な分野で、斗いの中心にあるだろう。脈々と受け継がれて來たこの斗争が、今日、再び、大きくクローズアップさ

れているのは、米帝国主義のベトナム侵略戦争の為に他ならない。

かく言う間にも、基地内の滑走路からは、一帯を圧する爆音をとどろかせながら、米軍輸送機が、一機、又一機と、我々の頭上を越えて飛び立つてゆく。基地内には、独特的の色彩のまだら模様でカモフラージュした無数の輸送機が、ベトナム行きを、今や遅しと待ちかまえ整列しているのが見える。

ベトナムでは、それらの輸送機が運ぶ、兵隊や、ナパーム弾や、鉄砲や、砲弾によって、今日も、無数の人民が殺りきの中にもだえ、憎しみに心をわき立たせていることだろう。

これ程、ベトナム戦争は、我々の身近にあるのだ。

「この米侵略機をベトナムへ送るな！」

これは、日々、その実態を眼のあたりに見ていてる現地反対同盟の皆さんのもっと現実的な訴えであり、スローガンであると聞いた。今はお斗う、二十三戸の、農地を耕す人々は、いつふりかかるかもしね「墜落」による危険にもめげず、又、執ような、防害、攻撃にもめげず、そう叫び続いている。

米侵略者にその基地を提供する日本政府は、ベトナムの人達が言うように、同じ侵略者の仲間であり、ナパーム弾を作り、売る軍需資本は、侵略者そのものである。

砂川斗争は、そうした侵略者や、それに協力する者、即、帝国主義者に対する斗いとしてあるだろう。侵略者の意図を見抜き、それを打ち碎く斗いを追求し抜ぬけなければならない。

砂川はその突破口となるだろう。砂川基地拡張を阻止することは、更には、軍事基地を撤去することは、そうした侵略者の意図を一つ打ち碎く斗いのものである。

帝国主義者の侵略への野望は尽きないだろう。しかし、現地二十

三戸の拡張阻止の固い決意は、更に尽きないだろうし、我々の斗いも、尽きることはない。

る。

なお、私は、デモの途中に於いて、全く不当な官憲の弾圧によつて逮捕され、四日間の行動の自由を奪われたことに對して激しいいきどおりを持っている。

指揮者でもなく、具体的に暴力を奪つたわけでもない（もつとも、官憲の暴行がすでにに行なわれ、弾圧の意図があからさまな状況に於いては、我々の暴力そのものはむしろ正当化されるべきである）にもかかわらず、たゞ、そこにいたといふ理由のみでの逮捕は、全く不当であり、抗議しなければならない。

私の逮捕に対し寄せられた様々な支援、励ましに対し、心から感謝しております。

（大阪市大生協）

三戸の拡張阻止の固い決意は、更に尽きないだろうし、我々の斗いも、尽きることはない。

いかなることがあっても、基地拡張を許してはならない。全国から結集した代表が「基地拡張実力阻止」の固い決意を次々と表明し、斗いの準備を整えつつあった。だが、一方、我々の集会から、わずか百米程離れた一角では、『挑発者』から守るために、まわりを柵でかこんだ一群が、狂ったように歌い、おどつていた。我々、地区反戦青年委、全学連、社会党、地評等との統一行動・共斗を、いわれもなく拒否した、日本共産党と、日共系各団体の『團結を確め合う』集会がそれであった。

彼等にとつて斗争は、どうでもよいことであった。組織の拡大と、團結心を確認することが、より大切なことだった。要するに共産党的な主張が入れられない斗争はだめなのである。曰く、挑発者集団がいる。曰く、分裂主義者がいる。曰く、日共系の団体が主催者の中に少ししか入っていない寺々……。

従つて共斗はできない。のである。日共のこれらの主張は、十数年もの間、死にものぐるいで斗つてきた現地反対同盟の人達を激怒させた。現地から見捨てられた現地斗争は茶番である。かくして、帝国主義者の侵略と戦争政策の眞の意図を見抜き、実刀でそれを阻止する部隊と、我々の団りにこそ侵略者がいること、（即ち、『死の商人』の先兵を派遣する日本独占資本と日本政府の意図）を正しく見抜くことができず、無意味に「アメ帝帰れ」のシヌープレコールと「歌とおどり」で團結を確認するだけの部隊との違いは、彩やかに、現地反対同盟の方たちの眼に浮き彫りにされたのであった。

我々は、この中で又、真に斗う部隊の強化と、あらゆる職場、地域での戦斗的反戦活動の重要性を改めて確認することができたであ

砂川基地拡張実力阻止、五・二八青年学生総決起集会に参加された全国各地の労働者、学生のみなさん！基地拡張予定地である滑走路北端において全国各地の労働者、学生のこのような参加のもとに開催された本日の集会は去る二月二六日、同じこの地において開かれた集会にもましての成功をかちとった。この集会の成功は、日夜職場と学園で支配階級の圧制と闘っている我々労働者と学生の互の絆を一層強めたばかりでなく、この十二年間自力で闘い、基地拡張を一步も許さなかつた地元反対同盟の方々に対する励ましと、全国各地での集会の成功を見守る全ての仲間にはかりしれない連帯と激励を与えたと考える。

集会に参加された全てのみなさん！本集会の成功の第一の意義は米軍のベトナム侵略戦争の輸送基地である砂川基地拡張阻止の闘いを一步すゝめたことである。拡大の一途をたどり、戦後二〇年間の擬制的平和をうちやぶり、開始された米帝国主義者の侵略行為は、非武装地帯への北進とさらに一層その度合をましている。

事態は以前にまして全世界人民に、この帝国主義的侵略行為に対する反戦の闘いを要求しているのだ。その課題はどの國の人民にもまして日本労働者と学生に課せられたものである。なぜならば、あらゆる意味において日本こそ米軍のベトナム侵略を支える補給基地となつてゐるからである。その最大の役割を果す砂川基地拡張に対する本日の闘いは、米帝国主義者のベトナム侵略に対する労働者、学生の闘いを一步進めたものといわねばならない。

第二の意義は日韓条約締結以来、米軍のベトナム侵略に伴つて、とみに帝国主義的国内体制の確立をつよめつたある日本帝国主義者に対しても労働者、学生の反撃の第一歩を確立したことである。第三次防衛計画や自衛隊の適格者名簿の作成にはつきりと見られるように、自衛隊の核武装による帝国主義軍隊への強化をいそぎ、ベトナム侵略戦争への積極的加担と共に、いまや公然と侵略的姿をはつきりさせた。職場や学園での資本の攻撃に対すると共に、これに対する闘いを一層強める必要があるだろう。

第三の意義は本集会が過ぐる二月二六日の集会よりもはるかに強化発展された内容をもつて実現さ

れることである。その第一は地元反対同盟の方々の努力によるものといわねばならない。二六集会後今日にいたる三ヵ月間、地元の方々は忙しい農業もなげうつて全国各地の仲間の集会に参加して下さり、今日はまた共産党をはじめとする様々な防害をもはねのけて、我々の集会への絶大なる協力を下さった。我々はこの協力に感謝すると共に、なお一層その連帯をつよめねばならない。第二は過ぐる三ヵ月間の努力の中で、文字通り全国的集会をかちとつたことである。二六集会が東京近辺の範囲に限られていた時点から、闘いは全国的にひろがり、各地での集会の実現の中で反戦青年委員会と全学連の強化をかちとつて來た。我々はこの組織を闘う者の母体としてなお一層職場と学園にひろめてゆかねばならない。

しかしこのような本集会の意義とは別に本日実現される予定であつた東京地評、三多摩労協四〇〇〇〇名の労働者の組織参加による統一行動が日本共産党の妨害によつて流産に帰したことを極めて残念に思うものである。日本共産党は実現される予定であつた歴史的集会に対し「東京地評の参加は共産党にとって不利である」というそのことのみを理由に統一行動を破壊した。このような共産党のセクト的態度こそ、労働者、学生の闘いを破壊するものとして厳しく弾劾されねばならない。と同時に労働者の組織である地評参加を拒否することは、何よりも共産党が労働者の党でないことを明白に表わしている。

全国の労働者、学生のみなさん！帝国主義者の我々に対する攻撃は極めて厳しい。我々が自らの闘いを一步でも弱めるならば、敵権力から多大の攻撃を加えられることは明白である。事態は本日の集会にもまして全国労働者、学生の闘う團結が要求されている。我々本集会に参加した全ての者は、全國の仲間にその團結をよびかけると共に、三多摩労協、東京地評が本日予定されていた統一行動を実現に向けさらに一層の努力を重ねてくれることを要請するものである。

全国の労働者、学生諸君！地元反対同盟との固い連帯のもと砂川基地拡張実力阻止に向けさらに闘いの發展をかちとろう。

集

会

宣

言

科 資 爭 戰 閩 川 砂

一、砂川

一、基地拡張の要因

a 立川基地はヴェトナム侵略戦争促進の最大の補給基地である。兵員、資材は、米国から直接に空輸され、（注 月間四千トンの物資、年間四十万の兵員）かつ、ヴェトナムへ直輸される。

b 又太平洋空軍司令部と直結し、直属のヴェトナム侵略戦争の作戦司令部が存在する。

c そして、非武装地帯侵入に至るヴェトナム侵略のエスカレーシヨンに呼応するものとし、立川基地の滑走路が二一三〇メートルから二六〇〇メートルへと拡張されようとしている。それは滑走路が短い故に全搭載能力の六〇・七〇%しか搭載できず、物資満載の為一度横田を経由しなければならぬ不便がある。

砂川基地拡張は、ヴェトナム侵略戦争の後方戦略一戦術基地としてその最大限の機能を發揮せしめるテコとしての位置を占めている。

二、基地拡張と反対闘争の経過

a ヴェトナム侵略戦争の拡大と日帝の加担の深化に対応して、日本帝国主義者は、拡張プランのもとに、昨年三月と九月、二度の擬装事故を反対同盟の農家近くに引き起こし、これを境にその現地住民の恐怖心により、防衛庁敷設局は買収工作のベテラン藤崎施設局長が連日の工作を行なった。青木一郎・吉沢闘争委員長以下（そ

の買収資金は一億円）十五名の脱落者が出てた。

b 現地反対同盟は、青木・宮岡正則行動隊長を選出しに 10・21 闘争等を通じ闘争支援を全国に呼びかけた。

c 10・17 藤崎敷設局長の通告「平和広場等すでに買収した土地に対する整地・バラ線張り止めよ、国有地管理上十一月中にブルトーラーを入れる」が発せられ、現地は立川七団体（地区労・社・共・社青同・民青・青婦協、反対同盟）で「砂川基地拡張阻止地区共同」を作り、東京都下の労組・地区反戦・全学連と提げ、本年二・二六第一回統一行動を開。

三、「三方面作戦」「三裁判」

a 佐藤政府はイ、未買収土地の強力な買収の実力行使ハ、未買収土地への「都收容委員会」の強行裁決による強制収容の三方面から攻撃してきている。

b 収容手続の図の説明

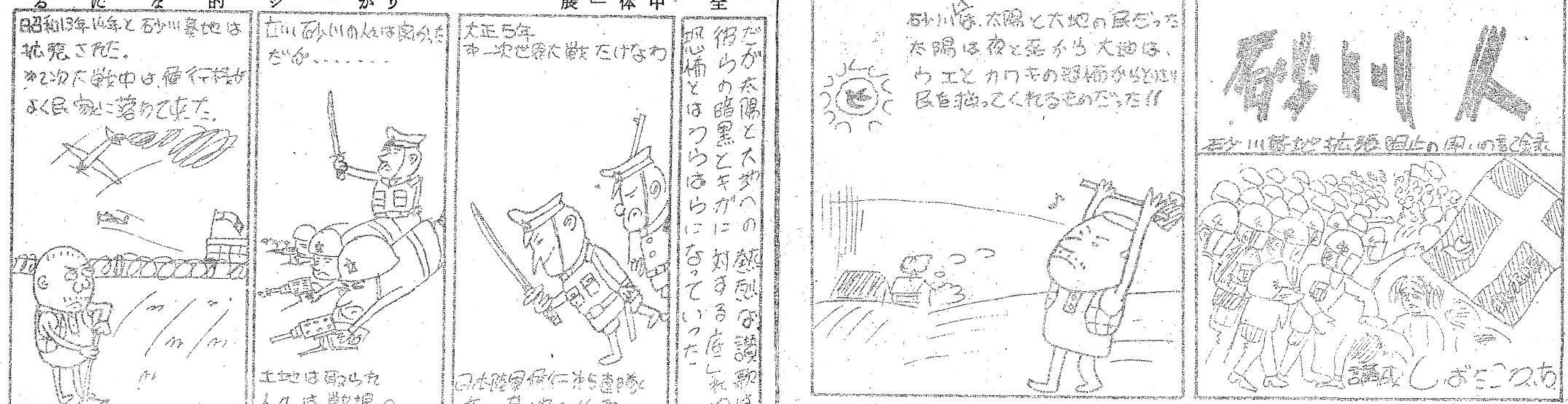
(1) 6 の地元民との協議は「条件派」との妥結が成立し、ヴェトナム侵略、日米間のアジア経済軍事政策について協定され、（これは従来の日米関係を一新するものである。

a ヴェトナム侵略戦争はアメリカが中心になって遂行する。日本はその後背地で長期的な中国封じ込めの態勢を整える。

b アジア。太平洋地域の中を日本を含め東北・西南・東南アの地域協力さらに広はんなアジア太平洋連帯圏をつくるべきである。

c 日本を含め、米国との双務的多角的防衛条約関係にある国々は、自らの防衛力強化につとめるべきである。

d アメリカの核の傘の保持。直接戦力のひきあげたあとをアジア諸国の軍事力で埋めるべきである。



e これ等を日本の指導的役割の下に行なうべきである。

(d) 三矢作戦。フライングドラゴン作戦。ブルラン作戦 一九六五年二月「三矢作戦」

と呼ばれる秘密文書が暴露された。この文書の内容は、第二次朝鮮戦争を想定し日米安保条約にもとづいて「日米共同作戦体制」をかためるとともに国内では、開戦直後に徵兵・

争立法を成立させ、「国内革命勢力」を排除するものとして民主勢力を弾圧するための詳

細な計画を示していた。

a 「七月十九日夜刻、突如中共機をふくむと思われる北朝鮮の戦爆大編隊が、韓国の主要空軍基地および都市を奇襲攻撃し、夜半にはいって、北朝鮮地上軍は軍事境界線の全線

にわたって攻撃を開始し、東部国境地区においては韓国反乱軍および革命分子の策応もあって、相当の進出をみたもようである。……在韓米軍司令官は……国連軍としての行動を開始することを宣言した。また米太平洋軍司令官は直ちに東北アジア所在の米三軍に対して韓国救援作戦の開始を発令した。

——七月二一日、関東において日米安保協議会を開催して、イ、当面の情勢判断 口、日本に対する事態の波及と日本防衛準備について連絡協議を行ない、このあと、政府は同日夜臨時閣議を開き、その結果防衛庁長官は、総理大臣の承認を得て、自衛隊に防備出動待期を、下令した。又政府は緊急声明を發表し、かつ総理大臣は自らテレビを通じ『いまや我が國は共産側の直接侵略の危機に直面している。祖国防衛のため国民のけつ起を要請する』とのべるとともに、自衛隊に対し防衛出動待機ならびに緊急作戦準備を下令したと發表した。〔三矢作戦原文〕

b 「自衛隊が朝鮮戦線支援のため、協同作戦を実施する」「アメリカ軍との有機的提携」と海外派遣を明確にしている。

この三矢作戦、日米間の焼直しとして、しかも現実的演習されているのは、フライングドラゴン計画、ブルラン作戦であり朝鮮後方の北鮮、中共への侵略目標としている。

以上の如く、日帝の独自的侵略軍隊の整備、極東反革命戦略体制への日帝のヘゲモニー確立、米帝からの肩替りが実現されつつある。

ハ ヴェトナム侵略加担は、日帝のアジア政策上から推進されているのである。

* 一〇度前後にわたる原潜佐世保、保横須賀寄港

* 原子力空団エンタープライズの寄港予定

LSD、長崎医療団の派遣、自衛隊の駐在武官のヴェトナム派遣、沖縄基地拡張土地獲取への協力

* そして砂川基地

二 日帝のアジア侵出と ヴェトナム侵略加担

A アジアの経済侵出の現状とヴェトナム特需

アジア経済侵出の現状

イ へ六四年前後を境にして、アジア諸国への国家資本輸出の急造

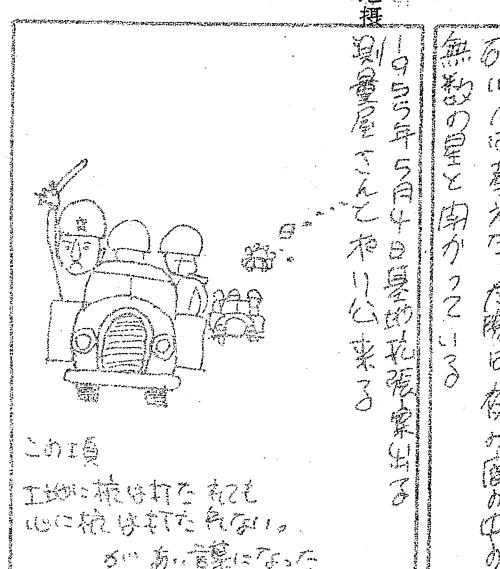
韓国II「日韓条約締結」にともない国家資金五億ドル 民間三億ドルの「経済援助」

インド 円借款約束額 二億三三〇万ドル、バキスタン円借款II一五億ドル、台湾II一

億五千万ドル、インドネシア軍政権三千万ドル

ロ ピルマ、フィリピン、インドネシア、南ベトナムに対し、賠償額 (十一億二千ドル) カンボジア、ラオス、ビルマに対する「賠償に伴う経済協力」七億四六六〇万ドル、これを引き当てにして重機械類の輸出、合併事業開発などで、重化学工業品の市場を開拓しつつある。

ハ これらの国家資本輸出、賠償等を利用しての経済侵出に呼応して六五年四月「東南アジア開発閣僚会議、七月ラスク訪日に対しての「日本貿易経済合同委」で行なわれ、日、米ベトナム関係の調整と日本の東南アジア低開發国への介入が意図されている。



a メコン河流域開発計画、その資金供給機構としての「アジア開銀」の創立への積極的参加
 b 「東南ア農業機発会議」の設置と「アジア農業開発基金」「肥料回転基金」等のアメリカの東南ア諸国への食料援助の各国の見返資金を集中し、日本の管理、プランのもとに農業開発を行なう。
 c インドネシア債権会議の日本主催等がある。

ヴェトナム侵略戦争とヴェトナム特需

イ 六五年以来日本資本主義は大巾な輸出増大と国際収支の黒字を示したが、この直接の要因はヴェトナムの直接。間接特需があり、ヴェトナム侵略戦争で日本資本家階級は利潤を得、かつ日本がアジアの反革命の兵器庫の任務を果してることを示している。
 ロ 米国への航空機、ミサイル関係、電子機器等、韓国へのジャンクルシユーズ、タイ、フィリピン、オーストラリアに銃、弾薬、小型ロケット、ペリコブター対戦車ミサイル等の兵器輸出、南ヴェトナムへのヤンマーディゼルの小型船舶用エンジン一千台等々
 統計七八億（六六年）
 ハ 朝鮮戦争特需最高時に匹敵する。

B ヴェトナム侵略加担と日米軍事戦略体制の再編

日帝の経済力の増加、アジア進出の本格化、それに見合うものとして日本帝国主義の海外侵出をめざして、独目的な軍事力強化、そして日米戦略体制の量質面における再編が進行し日本政府のヴェトナム侵略加担政策は、その重要な一部である。

日韓台の政府的軍事的ヘグモニーの日本のかくとく、アメリカ帝国主義の譲歩一肩替り東南アでのアメリカ帝国主義の階級闘争の武力抑圧、日帝のそれへの、後方根拠地としての協力、農業危機の克服と近代化、以上の日本帝国主義のアジアへの反革命分業体制が日韓以降、エトナム侵略戦争の拡大の形で進行している。かくの如く、七〇年安保条約と日米関係は再編されつつある。

イ 日米貿易合同委の内容

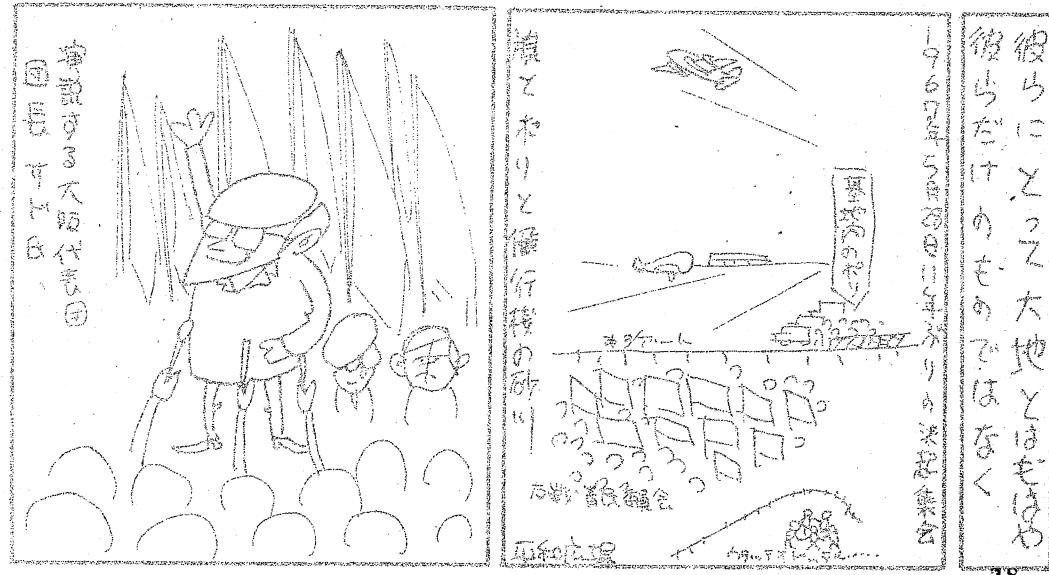
六六年七月「アジア開発閣僚会議」「太平洋一アジア閣僚会議」等一連の国際会議の後ラスク国務長官出席の下に開かれた。

ロ、都收容委は現在十四回をむかえ、強引な実質審議一議決が準備されている。町町注 都收容委の構成は飯沼一省を会長として、官僚、資本家、名譽教授等の反動派が占めている。
 又、五六年の砂川闘争にまつわる十年裁判が三つあり、それぞれ結審の段階にあり、基地拡張実現に呼応している。

- イ 内閣総理大臣の收容認定無効取消
- ロ 基地内の土地明渡要求
- ハ 東京都收容委員会の審理権不存在確認

三 第三次防衛計画

- a 六七年度から七一年度の五ヵ年計画・第一次防衛計画の一倍半の二兆七〇〇〇億
- b 自衛隊の核ミサイル化
- イ 核弾頭装置可能なナイキハイキュリーズ三個大隊の新設。編制ずみのナイキアジャキュリーズは二四〇基になる。低空用地対空ミサイル装備の大隊は二個大隊から六個大隊に増加、将来小型核弾頭を装備する可能性をもつR-I-30二個大隊も編成。
 ミサイル「タータ」、ミサイル「アスロック」積載の駆逐艦増強進水。これらミサイル体系と結びついてレーダー積載機三〇機配置とバッヂの完成。空軍では核弾頭塔載可能のF四、F十九、YF-IR-Aなどが採用、対核防衛戦力として化学部隊の編成。



ロ 注目しなければならぬのはミサイル「オイキ」「アジャックス」がハイキューリーズに編成されることである。ハイキューリーズはアジャックスが射程四六キロ、マツ二・五で旧式化しているのを一五五キロ、マツハ三・三、一キロトン、四〇キロトンの核弾頭

塔載可能な最新式ミサイルであるということ。
ハ 北から西への作戦の実行が公然化されている。これはソ連北対策から、中国・北朝戦対策に重点が移動したことである。東京一北九州に三六アジャックスを携帯する一個大隊を配置、

自衛隊の海外派兵の重武装化と増強

イ 国産六一型戦車（世界トップレベル）四〇〇両、一〇六ミリ自動無反動砲三〇〇両

高速装甲車二九六両が作られ、これによつてアメリカ貸与の旧式兵器の更新が進められ西部方面の一つの師団を、今北海道の第七師団のようなペントミニク師団（原子機動戦のための五つの機械化戦闘団からなる師団）に転化する。海上自衛隊では、いよいよ本格的ハシター、キラー、グリーブ（潜水艦攻撃艦隊）の新設に着手する四九〇〇トン級の駆逐艦二隻

（D H 海中に投下する捕音器を積んだ）対潜ヘリコプター三機、対潜ロケット、高速魚雷を装備）、夫津風級の三五〇〇トンミサイル駆逐艦（DDG）数隻、航空自衛隊では四一年度までに航空機統計八八〇機、次機練習機TXの国内開発化一昨年からF八六戦闘機が地上爆撃訓練に転用されている。その他爆撃機隊編成と長距離空輸訓練施行。

ロ 国内治安対策の、内乱鎮圧の機動戦、あるいは東南アジアクルゲリラ戦に、対抗する、機動性に備えるものとしての大型ヘリコプター部隊による大規模な空航部隊の新設、更に三六人乗大型武装ヘリコプター四〇機の空輸大隊の創設。陸上自衛隊の北部一東北一東部一中部一西部の各方面にも一個中隊三〇〇人を運べるヘリコプター団が置かれる。

ハ 冲縄、台湾への現地研修、遠洋練習艦隊による東南アセアン、サイゴン駐在武官の常駐等に引き続いての四一年度南ベトナム一タイへの公式の軍事視察団が派遣された。

有吉團長は「日頃東京で情報の収取、分析にあたっている実績に見て正確を期する」とのべる如く、「国連軍」としてのベトナム派遣が自衛隊内部で準備されていることを裏付けている。他方外務省では「国連協力法案」の作成すみで、同時に自衛隊法の一部が、改訂され、国際平和の安全という抽象語が付加され、それを合法化している。外務省は「国連軍参加は憲法に違反せずに自衛隊法の一部改訂で可能である」という見解を公然化させつつある。ちなみにこの見解の自衛隊内部の浸透度をみると「海外派兵が下令された時の、覚悟はできているか」の思想調査では、海上自衛隊六〇七五名に対して、イ宣誓通りの覚悟あり一三〇九七ロ宣誓した以上はやむをえず一五二七ハできればやめたい一九〇ニ下令と同時にやめる一七八の結果を示している。

イ 第三次防の武器は、八〇%国産化が予定され、軍部の「後方補充体制の確立」という軍事的要請、第二次防以来の軍需産業の発展、米帝の軍需援助打切りの三要素の結合したものである。七〇〇〇億円の内、空機工業関係は、受注二四社、四〇〇〇億、三菱重工川崎航空機、石川島播磨、富士重工、新明和工業等が七〇八〇。

とくに三菱重工の総受注額は二六〇〇億円に達する。日本の軍事生産額は総工業生産比〇・六〇（三九年）と低いが、独占大企業の量生産額の一〇・三〇%を占めていることは重要である。

エ 国内治安対策……これについては治安行動草案一国防基本法案の項で説明する。

四 治安行動草案

六〇年安保闘争後、治安行動草案が作られ、三矢作戦（六三年）に対応する国内戦時管制の確立の骨子「臨時国防基本法」が作成され、自衛隊の「治安出動」はこれらを基準にして行なわれる。治安行動草案は「陸上自衛隊の治安出動及びこれに関する訓練の一般的根拠を与えることを目的とし、一般の作成行動に比し治安行動上特に考慮すべき特異事項について記述する。」とのべ原文には第一に「引抜きとはスクランブルを組み……妨害する

「激しくゆれ動いた砂川基地」の一年

六六年

一月一二日 砂川基地拡張反対同盟旗びらき（五番公会堂）

三労を中心に各団体支援共闘体制の再開と具体的運動を起すこと確認

藤井上人（日本山妙法寺）「流さなければならぬ血は流さねばなりません。失なわなければならぬ生命は失なわねばなりません。」と決意にみちた印象的あいさつ。

二月一六日 「収用委員会の権限不存在裁判」第四回公判。

支援動員傍聴席あふれる。
八月二二日 地元反対同盟総会。

吉沢闘争委員長脱落の「あいさつ」とを基地に残し煙につゝこむ。

四月六日 「収用委員会の権限不存在裁判」結審となる。

八月二二日 地元反対同盟総会。

三月六日 C一三〇カーポスター尾翼

を基地に残し煙につゝこむ。

四月六日 「収用委員会の権限不存在裁判」解任。

八月三一日 沖縄、新島、砂川、現地懇談会（中央労働会館）

九月一二日 DC七型輸送機民家すればそれ墜落。（計画的といわれてゐる）

一〇月一八・一九日 一〇・一一スト参加の日本山妙法寺のお会式が藤井上人のもとで行なわる。

一〇月一八・一九日 一〇・一一スト参加のため「ベトナム戦争反対」の駅頭ビラまき。

一一月二〇日 砂川町全町行動隊の再建決起集会（五番公会堂）立川七団体（地区

労、社会党、共産党、社青同、民青青婦協、砂川反対同盟）で「砂川基地拡張阻止立川地区共闘」が生まれる。

（この七団体で、一〇・一一スト実行委員会をつくつていた）此處を主

二月二日 「立川地区共闘」を中心に、防衛施設局立川事務所に抗議、施設課

長「出血をみてまでもやりたくないが

国有地管理上、整地しバラ練を張るの

がなぜ悪く……」と居なおる。
一二月三日 社青同立川支部、爆音でゆらぐ日本山妙法寺道場で地元の人たちと交流。

一月八日 太平洋戦争勃発をも記念し、無縁仏の供養式この日から一週間、日本山妙法寺の人たち、抗議断食と現地

暴徒を排除する戦術である」「群衆に對して広報、警告……全ゆる手段をつくしても解

バトロール。

散しない場合にはこれを暴徒とみなして行動する」と明確に大衆デモ弾圧を目標にし、第

一二月一三日、「立川地区共闘」を中心いて、社会党三多摩分室、共産党三多摩地区

二に「暴徒の占拠している炭鉱、工場地帯、電話地帯を奪回するための制圧行動云々……」

の如く労働運動、争議、ゼネスト等々から更に内乱状況を想定しての戦争一装甲車一火炎

放射機、ヘリコプター等を出動させての鎮圧作戦がのべられ、これは三矢作戦の出動と同

時に「革命勢力排除（原文）」と同一のものである。第三に治安機関、行政機関、民間機

関を動員しての系統的、組織的情報活動」が規定されている。第四に自衛隊出動の手続に

ついて司令出動の場合は都道府県議会に報告すればよい。「要請出動」が明記されている。

これらにそつて自衛隊内部には通称「新選組」とよばれる・指導者逮捕の特殊部隊が

作られ、治安出動訓練一市街戦が想定されている。

五 国 防 省 昇 格

すみやかに事態に対抗して行動能力を維持し、後方支援体制を強める為に国防省昇格を行なう（第三次防原文）とのべられていくと長官が大臣になることによつて独自の権限を強め専門部局を拡大し、自衛隊運営に不可欠な財政機構の確立を目指している。

六 自衛隊適格者名簿

「いま十八才から二十四までの男子を対象とする自衛隊敵格者名簿が全国各地で作成されています。これは昨年五月二六日防衛庁事務次官と人事局長名で各都道府県知事あてに出された名簿にもとづくものです。この名簿は戦前の『徵兵台帳』の復活につながるものであることはいうまでもありません。

（反戦青年委発表資料より）

砂川基地拡張阻止

反戦闘争を全国化し 七〇年安保闘争の序曲としよう

山田二郎

反戦闘争は高揚しつつある

佐藤内閣一東洋一の帝国主義軍隊となりつつある自衛隊と機動隊により武装されている一にとって、五月二八日に砂川に集った一万二千の労働者と学生のたたかいは、とるに足らぬものであつただろうか？あの現地での強烈な弾圧や、国会デモの禁止や公安条例への固執を見れば明白なよう、佐藤内閣は戦闘的大衆行動へおそれをなし、積極的に抑圧体制強化を考えている。マスコミは佐藤首相ら反動派の七〇年安保（騒動）への恐怖からきていると評している。

五月二八日の行動は、佐藤内閣や反動勢力をおそれさす政治闘争が高揚しつつあることを示したといつてよい。

砂川闘争になつたエネルギー

ここでまず確認したいことは、五・二八のたたかいは、六〇年安保闘争以後、職場と地域で日本の支配権力（帝国主義化を急ぎ平和をおびやかす権力）と対決してきた者が遂行できた、たたかいであ

又、学生の実力闘争については、共産党は、トロッキスト分裂主義者とキャンペーンをはり、反党分子とは統一行動をくまないと言つてはいる。だが、現地反対同盟は、十二年前の砂川闘争以来、学生の行動を高く評価しているし、私たちにとっても、「あれだけがんばる必要がある。もつと我々労働者がやる必要がある」と感じられた

日韓闘争以来の日本の政治闘争の高揚をになつたのは、自治体論議や社会党政権論であけくれる社会党や、セクト化を強める共産党ではなく、地区反戦に結集した労働者と学生（全学連）であったと言える。

日韓ベトナム闘争時の四〇〇〇万署名運動の時集まつた千何万かの署名を先だって政府へ届けたというエピソード的新聞記事は、政治闘争における指導と戦術の再検討を要求していると思います。

日本主義と、広く、強く対決していくことが必要です。そのための課題はたくさんあります。

ベトナム侵略反対！

アメリカ帝国主義はベトナムから手を引け。
佐藤内閣は侵略活動へ加担するな。

沖縄軍事基地撤去。

公安条令徹廃。

エンタープライズ原空母寄港阻止。

第三次防一防衛二法一自衛隊適格者名簿反対。

核武装阻止！

砂川基地拡張阻止のたたかいを中心に ベトナム反戦核武装阻止の運動を 全国化しよう

しかし、これから的情勢は一段ときびしくなつてゐる事も確認する必要があります。

だが、このようきびしい情勢に負けず、常に姿勢をくずさず苦闘し、エネルギーをもち続けた者が、勝利の展望を切り開くことができると思います。そのためには、忍耐強く、意識的、組織的に活動することが必要です。情宣活動を行ない、組織活動を行ない、一つの物質力にする必要がある。

その中心は、砂川基地拡張阻止にあると思います。だが、これは、

ただ単なる基地闘争ではありません。突破口をつくるのは、原点となるのは、あくまで、現地実力阻止闘争ですが、私たちの任務は、全国化、特に労働者の、労働組合の闘いとするため職場と地域でがんばることにあるとと思う。たたかいを全国化し、アメリカ帝国主義と結び、海外侵出と日本の労働者市民の抑圧を意図している日本帝

日本の独占資本を支援し、産業政策を労資で話しあいをしていく」
要するにナショナリズム、排外主義、極端な反共主義。

こうした、職場抵抗、反合理化の困難になる中で右の路線にひっぱられ、政治闘争を軽視するようなうごきが強くなっています。

しかし、攻撃の一連のうごきの一例として「三矢作戦」で想定された、自衛隊の非常事態措置諸法令を見てみよう。

- (一) 人的動員
 - ① 一般労務の徴用 ② 業務従事の強請
 - ③ 防衛物資生産工場におけるストライキ制限
 - ④ 官民の研究所、研究員を防衛目的に利用
 - ⑤ 防衛徴集制度の確立（兵籍名簿の準備、機関の設置）
 - ⑥ 国民世論の善導

- (二) 物的動員
 - ① 防衛産業の育成強化 ② 防衛生産修理施設の収用
 - ③ 防衛資源の培養・確保 ④ 防衛物資分配の統制
 - ⑤ 交通・通信の強制的統制 ⑥ 防衛研究・開発事業の育成（助成金） ⑦ 防衛生産等工場所有権の国家的收用

- (三) 国民生活の確保
 - ① 略

- (四) 隊員補充
 - ① 略

これらのどれを見ても、最近の佐藤内閣の攻撃と関連していることがわかります。自衛隊適格者名簿の問題、米軍との共同演習、大学研究室への助成金、二兆六千万円にもなる第三次防一兵器の国産化、武器の海外輸出、およびマスコミの統制が強まっています。み



これら一連の反戦の課題を、広くみんなのものにしていくことに力を強化のための産業再編成・合理化攻勢という日本独占資本の攻撃を前にして、日韓条約締結以後特に、IMF・JICを中心[new]に新右傾化路線が大きくなりつつあり、いわく「生産性向上運動支持・経済的闘争だけやり政治闘争・階級闘争はやらない。国際競争戦では、

日本の労働運動は、資本自由化を前にした海外競争力、国内競争力強化のための産業再編成・合理化攻勢という日本独占資本の攻撃を前にして、日韓条約締結以後特に、IMF・JICを中心[new]に新右傾化路線が大きくなりつつあり、いわく「生産性向上運動支持・経済的闘争だけやり政治闘争・階級闘争はやらない。国際競争戦では、

な、戦争と国内治安強化への強いじょう動をもつたものばかりです。これらが国防という名で日本の労働者人民を抑圧することを半分の目的としながら、アメリカ帝国主義と競合しながら、韓国へ東南アジアへ更にオーストラリア、ニュージーランド等と経済的に結合した太平洋経済圏の構想にみられるように、新植民地主義による侵出をするため、強力な軍事力を必要としています。このような極東の憲兵となることは、帝国主義の支配秩序・国家体制を守るためにものであることは明白でしょう。

だから、アメリカのベトナム侵略へは積極的に加担し、第九条と民主主義的条項を多くもつ憲法の改悪（小選挙区制）を考え、日本反戦軍事同盟としての安保体制の強化を軸とした権力の反動化と抑圧強化をすすめています。

私たち青年は、このような帝国主義支配と対決し、職場で合理化、新労務管理、しめつけ、分裂攻勢とたたかい、又御用分子と対決し、反戦闘争を高揚させ、七〇年安保を一人一人のものとするためがんばろう。

（全国一般労働者）

ヴェトナム侵略戦争反対！

佐藤内閣の侵略加担を許すな！

砂川基地拡張反対！

原空母エンタープライズ寄港阻止！

沖縄軍事基地撤去！

自衛隊適格者名簿反対！

第三次防核武装阻止！

佐藤帝国主義内閣打倒！

すべての職場、すべての地域に反戦青年委員会をつくろう！

青年は反戦青年委員会に結集しよう！

大阪における闘いと

今後の課題

福富 健

更に五・二八闘争によって明示されたところの、今次砂川闘争の持つ意味は、五〇年段階に於ける、平和闘争一般とは、基本的にその性格を異にしている。

それは明らかに、米帝によって日夜展開されている、ヴェトナム侵略の激化により、直接的に規制されると同時に、日帝の直接的侵略加担と、非和解的に敵対せざるを得ない事を明確に物語っているのである。

日本に於けるヴェトナム反戦の闘いは、日韓闘争前段と併行して進められて来た。しかしながら、それらの闘いは、依然として、ヴェトナム人民に対する「同情」「支援」とどまり「平和一般」として、あるいは、ナショナリズムの壁を一步もつきくずす事の出来ない闘いとして終始して来た。それは、日韓闘争に於いてすら、李ライン問題、漁業問題として、すりかえられ、日帝の極東アジアへの経済的、政治的、軍事的侵略への第一歩であり、日韓両国民に対する、階級的抑圧である事を、バクロし、運動として展開する事がなしえなかつたのである。

我々が、韓國人民、ヴェトナム人民と連帶しうる条件は何か、それこそまさしく、自國権力との闘いを通して、自らの闘いを徹底的に遂行する事を抜きにしては、一切ありえない。現地闘争に対する把握もかかる観点を要求しているのである。

「この侵略機をヴェトナムに送るな」この砂川の闘いこそ、ヴェトナム反戦闘争の、日本における環である。

一、問題提起

一、五・二八闘争の巨大な意義

戦闘の序曲は開始された。既に明らかにされた如く、五・二八闘争によつて、切り開かれた、砂川基地拡張阻止の現地実力闘争は、巨大な前進を勝ちとつた。

それは、十一年間に及ぶ、不屈の闘いの中から、鋼鉄の如く練え抜かれた地元反対同盟の闘いと、地元三多摩反戦を中心とした全国各地に於ける戦闘的青年労働者によつて形成された地区反戦及び十年前の砂川闘争の主力であると同時に、戦後日本政治闘争に於ける戦闘的実力武隊である、再建全学連の闘いの一大結集として展開されたのである。この五・二八闘争の巨大な意義が先づ確認されなければならない。

三 戰争の基本的性格

第三には、この砂川鬭争の基本的性格についてである。既に指摘した如く、現局面に於ける砂川鬭争は、日・米帝国主義との非和解的な鬭いとして、つき進まさるをえないとするならば、(A) 現地砂川に於ける、実力阻止、(B) 三次防、原空母寄港、自衛隊適格者名簿作成、防衛省設置、第三次防等の、日帝の軍事力強化、自主防衛路線との全面的対決の鬭いとの結合、(C) 沖繩人民の、米軍事基地撤廃、米日両帝国主義の支配に対する鬭いとの結合、(D) 七〇年安保破棄の鬭いとの結合を、その条件とするであろう。

そして、この事は、① 現地に於ける、労働者、学生、農民の提携による、現地実力闘争を軸とした、労働者のゼネストを含めたところの、全国政治闘争、② 更に反政府闘争を、他の(前述)諸課題と結合させて、日米両帝国主義に対する反帝闘争として展開し、③ 七〇年安保破棄の、戦闘的、大衆的、反帝闘争を準備する事を要請している。

四 主力部隊の条件は何か

だが、我々は、更に重要な点を指摘しなければならない。それは、闘いを担う主力武隊の条件は何かと云う事である。

前述の如く、五・二八闘争は、地元反対同盟、地区反戦、全学連を中心とした「実力闘争武隊」の登場と、それの一定の、定着化をものがたっている。地元反対同盟は、基地拡張阻止闘争から「この侵略機をベトナムに送るな」実力阻止を通して安保破棄へ」と云う、二つのスローガンを十一年の闘いの中から得し、この事は、自ら、プチブル農民としての、カセから解き放ち、階級的自覚へと至らしめた。今では彼らは、自信を持って語る事をはばからない。

のが、あの一〇・二一ストであった。

内燃していた戦闘的労働者大衆のエネルギーは、一〇・二一ストを契機として、その具体的形態をみいだした。それは、反戦青年委員会であり、その要めは、地域、職場、学園であった。この、下からの反戦闘争組織の形成は、全国各地に於いて追求されて行つた。この点こそ、第一次反戦青年委員会と決定的に異なる点である。これを第二次反戦青年委員会と呼ぶ事が出来るであろう。

その後更にこの第二次反戦青年委員会は、地区、職場反戦青年委員会としてその後幾多の脱皮をとげて行くのである。一つは、ベトナム反戦と云う組織の直接的課題から、原潜闘争、紀元節問題、三次防等々、帝国主義的諸政策の全ての課題との結合をなしとげ、問題別闘争機関から恒常的政治闘争機関への脱皮のきつかけをつかむのである。この点が、第二次反戦青年委員会の第一の特徴である。

更に指摘しなければならないのは、二・二六、五・二八砂川闘争の中に於いて、情勢の中に於ける、政治的環をみいだした事と、その事により、組織的定着化の契機をつかんだ点である。この点が、第三の特徴点である。

再建全学連について、若干の指摘を行うと、五〇年代砂川闘争の中核武隊の一翼であり、その後における「平和と、民主主義と、よりよき学園生活を守る」(八中委一九大会路線として確立)実力闘争機関とし形成され、勤評、警職法、安保の闘いの中で、その主流として、闘い、その過程の中から、反帝、労農学提携路線を体得して来た部分が、再度、今次砂川闘争の主力をしめる一定の必然的根拠を持つていたとみる事が出来るであろう。

だが我々は、この、反対同盟、地区反戦、全学連について指摘した点は、やはり事柄の一側面である事に留意しておかなければなら

「安保への対決と云う一点で大衆行動の統一をはかれないような集会には参加できません。反対同盟は、カライライではありませんからね」(宮岡副行動隊長)と。まさしく、反対同盟は、左翼諸潮流の、形成された反戦青年委員会は、諸潮流の政治的おもわくを含みながらも、日共以外の全ての潮流と、総評系大単産の青年部の、中央上部組織によって結成され、日韓闘争の最終局面まで、持続し、一定の役割を果した。だが、この段階に於ける、反戦青年委員会は、社会党、総評、および各単産の指導部に強く規制されていた事をその特徴としていた。したがって、その活動は、上からの動員指令の為の役割を果した。この日韓闘争までの活動を第一次反戦青年委員会と呼ぶ事が出来るであろう。

日韓闘争以後、闘いの波は大きく後退し、むしろその後、闘争の表面を色どったのは「ベトナムに和平を」と云う、ベト平連の闘争であった。この時期に於いては、組織労働者は、この小市民的平和闘争その中にセンボウと、ドゥケイの念すらいだきながら、逆に啓蒙されると云うみじめさを全体としては味わわざるをえなかつた。

だが第一次反戦青年委員会は、量的には、わずかでありながらも、その内部に質的に練えられた、戦闘的部分を内包していた。六五年段階に於ける、社会党総評の「ハノイ、ハイホン爆撃されればゼネストを」と云う空約束は、いつもの様に「情勢の変化」という事によつてホゴにする事が出来なかつた。それは、情勢は増え激化の一途をたどつたからである。情勢の激化と、下部労働者大衆、および一般市民からさえも、有形無形の圧力に抗し切れず、取り組まれた

ない。

五 地元・地区反戦・全学連

我々が、單に、既成指導に対する批判勢力になりさがる事によつて、甘んじるのであるならば、自己の正統性と、優位性の根拠としては、前項の指摘で十分であるだろう。だが我々その様な立場に甘んじる事は出来ない。いやこの事は、单なる我々の、主観的意図に根ざすものではなく、それは、我々をとりまく情勢、この間の闘争の推移の中から、客観的に明らかにされて來ているのである。それは、まさしく、砂川闘争の帰宿は、我々自身の主体的力の如何によつて左右する局面を迎えると云う事である。いやそれは、砂川闘争のみならず、その後にうちづく、諸闘争の中に於ける、労働者の階級形成過程にかかる内容をはらんでいるからである。今我々は、自己を、主力武隊である事の自覚に静かにかつ厳肅に接する。結合による、全国政治闘争として爆発させる為の条件を確立する事でなければならない。それとの関連に於いて、主体的課題を具体的に明らかにする事である。我々は、酔い知れる美酒をまだ手にしてはいないのだ。

六、闘争の全国化と大阪に於ける組織化

五・二・八闘争は、巨大な意義と前進をかちとったにもかかわらず、現地闘争の強さと弱点の両面を示した事をわざってはならない。今我々に課せられている課題は、闘争の全国化と、大阪に於ける闘争の組織化であり、七・九闘争へ向けての全面的な取り組みの強化である事を片時も忘れてはならない。それは全ての部分が、自らの持ち場における闘いの組織化と云う条件を欠かすならば、全ては、革命的、戦闘的空話に帰し、左翼日和見主義におちぶれざるをえないであろう。

この大阪の地に於いて、地域、職場、学園において、一層の取り組みの強化を行いう必要がある。この為には、大阪に於ける、闘いの総括を、はつきりと行う事を、その条件としている。

七・七・九闘争へ向けて

我々の当面する中心的任務は、七・九闘争への取り組みである。

五・二・八闘争を、党派的、セクト的利用の具にせんとした日共、および、五・二・八闘争から、一目散に逃出した社会党が、果して、七

・九に於いて、どのような対応をするかは、予断を許さない。それは、我々が、五・二・八闘争をはるかに上まわるものとして、どこまで取りくむ事が出来るかにかかっている。

二、五・二・八砂川現地闘争への

代表団派遣の中から

大阪に於ける砂川闘争は、去る、三月十九日に開催された、全関

団（団長、佐渡）の、大阪駅中央コンコースにおける、決起集会を開催し、学生、労働者あわせて、一〇〇余名の代表を派遣した。

三、六・三総括会議

現地における具体的情况については、又、参加者の感想等については、既に別稿において、生々しく語られておりである。ここでは、省略する。

四、闘いを地域・職場・学園へ

現地闘争参加によって勝ちとった成果は、限りないものがある。

それは、参加者自身を通して、地域へ、職場へ、学園へと急速に波及している。我々参加者が、現地闘争をいかにうけとめたかと云う具体的な生々しい報告は、先ほどの感想文とあわせて、六・三、代表団総括会議、筆記録を詳説されたい。五・二・八闘争らの中の意義については、すでに述べたのでここでは省略する。

三、大阪に於ける反戦闘争と諸ヘゲモニーについて

既にその若干部分についてはふれて来た。しかしながら、再度大阪に於ける、反戦闘争の全体を素描する事が必要である。それは、反戦闘争の現局面の核心に一定程度接近する事を意味するのみならず、大阪に於ける今後の闘いの方向と直接かかわる問題だからである。

西反戦討論集会に於いて、現地からの代表の報告によつてはじめてもたらされたのである。それは我々に対する、強烈な批判であると同時に、限りない戦闘的激励であった。その後、各地区に於ける、新たな地区反戦の結成と、その他の諸組織は、春闘と、打ちつづく選舉戦の中に於いても、照準をはつきりと、五・二・八に設定した。

一、北大阪・吹田等を中心とした地区反戦の取り組み

その組織化の中心になったのは、北大阪反戦青年委員会および、吹田地区反戦青年委員会を中心とする地区反戦によつて、職場に於ける「流血の記録・砂川」の数度にわたる上映、ヴェトナム問題とからませたところの地域、職場に於ける自主的な討論集会の組織化ラッセル裁判等の講演会の組織化、および、街頭、職場に於けるランバ活動を展開して行った。

先づ、吹田に於いて、五・二・八代表派遣が決議され、その後北大阪反戦青年委員会においては、十六名に及ぶ代表派遣の決定と、電通の職場を中心として十万円近くのカンパを集め全額カンパによる派遣を勝ちとった。

二、五・二・六、五・二・七闘争

この、北大阪、吹田を中心とした地区反戦に結集する労働者を中心として、その他の地域職場に於ける組織化と、代表派遣をうながし、五月二六日には、北大阪反戦青年委員会主催、電信反戦行動委員会（職場反戦）全大阪反戦青年委員会共催による、決起集会と、街頭デモを勝ちとった。その内容は、鶴嶋雪レイ（関大助教授、ラッセル裁判日本代表）氏の講演と討論および、全大阪反戦の代表団（団長、佐渡正昭、電信反戦行動委員会所属）の結団式を行つた。

一、闘争部隊について

まずははじめに、現時点に於ける、大阪に於ける反戦諸組織の概略にふれておきたい。それは、およそ次のものがその主要なものである。

① 反戦青年委員会、地区反戦、職場反戦、② 大阪反戦行動委員会およびヴェ平連、軍縮協、③ 改憲阻止会議、④ 安保破棄諸要求貫徹実行委員会、である。勿論これら諸組織が、社会党、共产党、総評等の有型、無型の影響から、無関係ではない。

その主な特徴を簡単に指摘するならば、

① 反戦青年委員会 地域、職場、学園をその中心とする反戦青年委員会については、既に問題提起の中に於いてふれて來たので多くを語らないが、ただ一点指摘するならば、第二次反戦青年委員会の段階における特徴は、地域反戦を単に、現実の職場における運動の困難性から、外部に逃避集團として設定されたものではなく、まさしく、個人、組織を問わず、構成員たる事を認めると同時に、その組織化と、活動の規準を、個人の自己満足的なものにとどめるのではなく、明らかに構成員全てが、地域、職場、学園等、あらゆるところにおける運動の組織集団である事を明確しているのである。更にこの事は、職場生産点に於ける組織化をその主要課題とし、その事は、單に職場から、地域へ活動家を引きずりだす事のみではなく、逆に職場に於ける主旨的な反戦諸闘争の展開と、職場反戦組織を、独自構築する事をうながすのである。（ex 電信反戦行動委員会）更に職場諸活動との結合を追求する。したがって、

したがつて、この事は労働運動の右傾化体制内化に内外両面から

抗しうる条件を備えていると云う事が出来るであろう。

② 大阪反戦行動委員会

昨年一〇・二ースト前段に於ける、労働者支援をその目的として、中ノ島中央公会堂における、十三日にわたる「反戦ハンスト」の決行によって、その姿を現わし、その主要な特徴は、組織労働者よりもむしろ、市民へ「誰でもできる反戦闘争」と云う主張をかかげ、ヴェ平連等との共闘により、ティーチ・イン、ティーチ・アウト、プロテストソング等によって特徴づけられる。この組織は、確かに市民への働きかけにおいて一定の役割を果してゐる事はいなめない。

ならば、その進むべき方向は袋小路か又は、小市民的、文化人的活動として、昇化してしまうのではないだろうか。天王寺動物園に於ける「親と子供の反戦デー」をやる事が必ずしも、悪いと云つていいのではないか。それらをいささかも過小評価するものではないが。

③ 改憲阻止会議

西大阪、アベノ、ネヤ川、枚方等に於いて結成され、地域に於ける改憲阻止の為の諸闘争、職場に於ける反合理化の闘いを展開している地味で、しかも、非常にまじめな活動をやっている。しながら一切の諸課題を、直接的に憲法との関連、合理化との関連でのみとらえると云う概念的把握が問題にされないかぎり、現実の情勢から大きくとりのこされる事はいなめないであろう。砂川闘争において、あるいはその他の政治闘争に対応しうる条件を早急に確立しない限り、経済主義的傾斜は増々強まるのはなかろうか。

いくつかの職場に於いて、反合理闘争を、懸命に展開している事は高く評価しなければならないが、この事によつて、いささかたりとも、政治闘争への無対応を正当化するとすれば、問題は別である。分散的諸状況をのりこえる事は出来なかつた。

三、一〇・二ーストの中で

成をもたらし、これらの三組織とも半年間に及ぶねばり強い闘いを展開して行った。又、それと併行して、電信反戦行動委員会、天王寺反戦青年委員会、東淀川反戦青年委員会が、それぞれ産ぶ声を上げ、それらは若干の例外を残して、ほとんど日韓强行採決と共に、機能まひか又は、学習会等へと傾斜して行った。これが、大阪および関西における第一次反戦青年委員会段階に於ける情況である。こゝ中から極めて多くの問題点が提起された。いづれにしても、個別分散的諸状況をのりこえる事は出来なかつた。

第四章 第一節 紀元節復活反対闘争と諸闘争との結合

一〇・二ーストは、奇妙な反響をもたらした。それ自体の総括は省略せざるをえないが、ただ一つ云える事は、ヴェトナム反戦闘争はいかに闘われるべきかと云う運動論、組織論の問題が政治的諸課題と関連して、論議の中心となつた。二・一一紀元節復活反対闘争は、中電労働者二十余名の出勤闘争をも含めて、反戦青年委員会の個別（ヴェトナム反戦）闘争機関から、恒常的政治闘争機関への脱皮の契機としての意味をもつた。第一次反戦においては、日韓と云う契機をつかみながらも、その衝撃によって消滅せざるをえなかつた（少くとも関西においては）。この点は注目する必要がある。

五、三・一九、全関西反戦集会と砂川闘争

三・一九全関西反戦討論集会に三〇〇名の結集を勝ちとり、これによつてもたらされた巨大な成果は、その質と規模に於いて、まさに画期的な事であつた。

その主要内容は、① ヴェトナム反戦闘争の位置付け、② 日帝の、軍事的侵略加担について、③ いかに運動を進めるべきか、この三点にわたる分科会の組織化と、ラッセル裁判および砂川現地代表からの報告であつた。

この集会における内容そのものが必ずしも画期的と云うのではない。それは関西における反戦闘争のはじめての結合であつたと同時に、関西に於ける砂川闘争の実質上の出発点となつたと云う事である。中でも砂川闘争の衝撃は、その後の活動のバネとして機能したのである。（前述）

④ 安保破棄諸要求貫徹実行委員会

紙数の関係で多くを語る事が出来ないが、ただ言える事は、③と同様、経済主義的職場闘争と、政治主義的カンパニーヤ方式、および組織化を闘争課題の上位に設定し、その矛盾を「政治意識」一般によって、克服しようとする試みは、まさに狂氣のさたではないだろうか。その巨大な組織力が、闘争課題に向つて、始動をはじめるのはいつの事だろうか。

以上、その素描を試みたわけであるが、その中には、いくつかの批判を含んでいる事は勿論である。しかし、これは、それらの諸組織に期待するからに他ならない。

二、日韓闘争前后

日韓前段に於ける闘いの中於いては、ヴェトナム情勢の激化と、参院選への没入が、その特徴であつた。六五年六月九日の社共一日共闘が、非常な注目をあびるという事が実態であつた。その中に於いて、全国反戦青年委員会が、提起され一定の闘争を組織し、統一戦線なき闘いと云われた日韓闘争の中の唯一のゆるやかなカンパニーヤ組織としての統一戦線であつた。

ところが関西における運動は、いく分おもむきを異にしていた。反戦青年委員会か、安保共闘再開か、はたまた、改憲阻止会議かと云う論争に明けくれていた。関西に於ける一部の意識的部は、独自の闘争武隊の組織化を開始した。

その一つは、神戸領事館前に於ける、労働者、学生、市民、文化人等による座り込みの開始である。この波紋は、革新の地、京都に波及し、京都青年行動委員会の高島屋前の闘いを強固に組織した。

京都の闘いは、大阪北の梅新に於けるヴェトナム人民支援戦線の結

六、五・二八へ向けて 春闘総選挙の中に於ける組織化

一、再度反戦青年委員会について

三・一九によって開始された砂川闘争の組織化は、JC春闘と云われる今春闘の組織化と合せ、そして又、黒い霧のふっかけ合いに終始した選挙闘争の中に於いても展開された。この過程は、大阪における運動の性格の変化をもたらすと同時に諸ヘゲモニーの流動を含みながら進行し、現時点に至ったのである。

七、大阪に於ける反戦闘争の現段階の基本的性格

大阪に於ける反戦諸組織のその主要なものについては前述した通りである。五・二八以前に於ける大阪の闘いは、必ずしもその諸組織間における特徴を鮮明にしていなかった。しかしながら、五・二八闘争によつてもたらされつゝある巨大な波紋は、新たな分野を絶えず、運動へ組織する様相をおびて來ている。それは、從来不分明であった運動の性格を明確化させると同時に運動武隊の存在基盤を大きくゆさぶり、運動のヘゲモニーの流動を不可避にさせるであろう。それは今後の闘争の中で自ずと明らかになる事である。

四、地域・職場・学園に

闘争武隊の構築を

以上、大阪に於ける五・二八に至る過程を素描する中で、既に多くの事が明らかになつた。それは、我々に新たな課題を明らかにしている。

おかなければならぬ。

現地実力闘争の試練をうけた我々は、この新たな試練を経なければならないであろう。これこそ、本格的な闘いである。

勿論地域、学園における、より強固かつ広範な組織化が併行的になされなければならない事は言うまでもない。

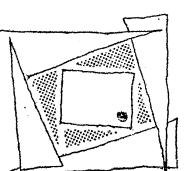
我々は、反戦闘争についてのいかなる試みも拒否してはならない。

セクト主義は厳にいましめなければならない。しかしながら、既に明らかにされた様に、現地実力闘争を軸にした、全国政治闘争を断固おし進め、日米両帝国主義との闘いへと一切のエネルギーを結集して行く事を中心にして行かなければ我々の闘いはその目標をあやまるであろう。

- 二、砂川、沖縄、原空母、自衛隊適格者名簿作成、三次防、防衛省昇格、小選挙区、安保条令等の諸課題を全面的に暴露し、全国政治闘争の爆発を勝ちとり、六〇年安保破棄の闘いへ向けて前進しよう。
- 三、七・九砂川現地闘争代表派遣を圧倒的に成功させよう。

(まだまだ、全てを語りつくしたとは言えない。後は、今後の闘いの中において、明らかにして行くであろう。)

(全電通)



既に反戦青年委員会については、かなりの点について明らかにした。しかしながら、この第二次反戦の特徴は、その組織化の対象を主要には地域に設定されて來ている。この事は、地域反戦が組織化の主要環である事は明らかであるが、それと同時に現在の情勢は、更に、職場反戦闘争機関の構築を強く要請している。現在段階に於いては、職場反戦はおそらく、全国的にみても大阪電信反戦行動委員会以外に多くを数える事は不可能であろう。そして又、この職場生産点における政治闘争の導入は、必然的に組合機関との結合を要求すると同時に一定の磨擦を伴わざるをえないであろうし、それは労働戦線の全体的な体制内化、右傾化との対立をもたらすと同時に宝樹等によつて唱ドウされている労働戦線統一論との対立は不可避である。それは、明らかに労働者の階級的課題を、社会主義革命の課題を、労働者の個人主義的、利己的、小市民的課題によつて代位させようとする意識的乃至は無意識的役割をはたしつつある。それはまさしく「労働組合インターナショナル」とも称すべき内容を含んでおり、それは不可避的に国民経済のワクの中にはめこまれて、資本の利益、国益を階級的利益に優先させる事を意味している。我々は、この点を把握したうえにたつて、断固として職場における反戦の闘いを組織して行かなければならぬ。そして、それは、反戦闘争のみならず、反合理化闘争、労働者の権利拡大の闘い、労働者の政治的自由の闘い、労働者の思想の自由の闘い、労働者の生活防衛の一切の課題と結合させて行かなければならぬと同時に、一切を賃金の額の高さによって代位させてはならない。我々が本格的に職場に於ける政治闘争を組織する場合には、どの程度の事は予測して

編集後記

大阪をはじめ全国の闘う仲間の同志的批判と講読を強く要望する
ものです。

(F)

五・二八砂川基地拡張実力阻止の闘いが我々に与えた強烈な衝撃は、今我々の内部で激しく燃えつづけている。生々しい軍事基地の姿、残忍無比な機動隊の弾圧の雨、いやそれにもまして過去十一年間におよぶ地元反対同盟の英雄的な闘いと、三多摩をはじめとする全国各地の、地区反戦との戦闘的な団結は、我々に更に困難かつ重大な、新たな課題を要請している。事実我々代表団は、帰阪後、直ちに総括会議、それにもとづいた地域報告集会、職場報告集会、現地報告の原稿書き、更に新たな組織作りへと、連日不眠不休の活動を展開している。そのわずかの時間を利用して本報告決定集の作成に着手したわけですが、これは、我々の新たな闘いの武器として、とりわけ、七・九へ向けて発行するものです。勿論内容については必ずしも十分なものではありません。しかしながらそれは、燃える様な闘いの情熱にみちています。若々しいエネルギーが躍動している。それは流麗な美文ではなく、たどたどしい行間からほとぼしる、抑えがたい我々一人一人の戦闘宣言です。

我々は、砂川の地元の闘いと、あるいは沖縄人民、ヴェトナム人の闘いとの連帶の条件を自己自身の闘いの中からさがし求めていきます。その為の記念碑です。

特に本書発行にあたっては、北大阪反戦青年委員会の全面的協力、全大阪反戦青年委員会の支援、三多摩反戦青年委員会からの力強い激励を受けた事を付記し、深く感謝します。

もう一点、総括会議筆記録および、その他若干の原稿を割愛せざるをえませんでした。

五・二八砂川基地拡張阻止大阪代表団 報告決定集

編集発行責任

佐 渡 正 昭

TEL.四四二・三三四一

取扱先

北大阪反戦青年委員会

TEL.四四二・三四二〇

北大阪反戦青年委員会
TEL.四四二・三四二〇

定価 一〇〇円

発行 一九六七年六月二〇日

